

Bulletin **270**

2017 夏号



Annual Report 2016

COLONNADE

2017年度支部長活動方針／支部総会報告

かながわ建築祭2017／大学院修士設計展／学生課題設計コンクール2017

FORUM

覗いてみました他人の流儀／温故知新／委員会活動報告／日本版CABEを考える



CONTENTS

Annual Report 2016

支部長挨拶

- 3 1年の活動を振り返って JIA関東甲信越支部 支部長 藤沼 傑

委員会活動報告

- | | | | |
|---|------------------|-------------|----------------|
| 4 | 総務委員会 | 広報委員会 | 建築相談委員会 |
| 5 | 保存問題委員会 | 苦情対応委員会 | 支部建築家資格制度実務委員会 |
| 6 | クライアント支援委員会 | 都市・まちづくり委員会 | 建築・まちづくり委員会 |
| | 災害対策委員会 | | |
| 7 | 国際事業委員会 | 環境委員会 | アーバントリップ実行委員会 |
| | 建築セミナー実行委員会 | | |
| 8 | JIAトーク実行委員会 | 学生デザイン実行委員会 | 大学院修士設計展実行委員会 |
| | アーキテクト・ガーデン実行委員会 | | |
| 9 | 支部大会2016実行委員会 | 交流委員会 | 委員会一覧 |

地域会活動報告

- | | | | | |
|----|---------|--------|--------|-------|
| 10 | 神奈川県地域会 | 千葉地域会 | 埼玉地域会 | 茨城地域会 |
| 11 | 栃木地域会 | 群馬地域会 | 山梨地域会 | 長野地域会 |
| 12 | 新潟地域会 | 中野地域会 | 三多摩地域会 | 杉並地域会 |
| 13 | 新宿地域会 | 城東地域会 | 文京地域会 | 渋谷地域会 |
| 14 | 世田谷地域会 | 千代田地域会 | 中央地域会 | 城南地域会 |
| 15 | 城北地域会 | 港地域会 | 目黒地域会 | 地域会一覧 |

部会活動報告

- | | | | | |
|----|--------|----------|--------|----------|
| 16 | デザイン部会 | 都市デザイン部会 | 住宅部会 | メンテナンス部会 |
| 17 | 住宅再生部会 | 情報開発部会 | 建築交流部会 | 建築家写真倶楽部 |
| 18 | 再生部会 | ミケランジェロ会 | 金曜の会 | 学芸祭部会 |
| 19 | 部会一覧 | | | |

COLONNADE

- | | | |
|----|---------------------------------|---------------------------|
| 20 | 2017年度 活動方針 | 山下設計 藤沼 傑 |
| 21 | 2016年度 支部総会報告 | 榎本建築設計事務所 榎本雅夫 |
| 22 | 第28回 JIA 神奈川建築WEEK かながわ建築祭2017 | コンテンツボラリーズ/関東学院大学 柳澤 潤 |
| 24 | 第15回 JIA 関東甲信越支部 大学院修士設計展2017 | 日本大学理工学部/佐藤光彦建築設計事務所 佐藤光彦 |
| 25 | 第11回 JIA 北関東甲信越 学生課題設計コンクール2017 | EOS 建築事務所 鈴木 弘 |

FORUM

- | | | |
|----|---|------------------------|
| 26 | 海外レポート 中国 福州市視察 —歴史と伝統、そして未来— | エムズワークス一級建築士事務所 松永 基 |
| 28 | 覗いてみました他人の流儀 黒田草臣氏に聞く | Bulletin 編集 WG |
| 30 | 温故知新 サステナブル社会からSDGsへ | 大野二朗環境建築研究所 大野二朗 |
| | 抱負を語る 未来の医療・福祉を創造するために | 芝建築設計事務所 望月厚司 |
| | 抱負を語る クライアントの期待の先へ | atelierA5 建築設計事務所 清水裕子 |
| 32 | 委員会活動報告 建築セミナー実行委員会 | 佐藤由巴子 |
| 33 | 委員会活動報告 交流委員会 | IAO 竹田設計 河野剛陽 |
| 34 | JIA 建築家大会2017 四国 阿波おどりの国とくしま大会 告知 | |
| 36 | 日本版CABEを考える 地域に根差した建築家の活動~こども目線のまちづくり活動 | アトリエエーワン 三原栄一 |

BACKYARD

- 37 『Bulletin』季刊化とHPリニューアルのお知らせ
38 広報委員会委員長、『Bulletin』編集長 退任・新任の挨拶
39 コラム 趣味の世界 小林道夫
39 編集後記

公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA 館

Tel: 03-3408-8291(代) Fax: 03-3408-8294

http://www.jia-kanto.org/members/



2016年度

1年の活動を振り返って



JIA 関東甲信越支部
支部長
藤沼 傑

昨年6月の総会にて支部長を拝命いたしまして、早くも1年が経過しました。この2016年度は4月の熊本地震から始まり、支部からも支援活動を実施後、災害対策について地域会、支部、本部の役割について議論を重ねました。社会の安全安心を実現するJIAの重要なミッションを少ない人数でどのように実現するのか継続的な議論が必要です。

5月にタイ建築家協会ASAの大会に参加しました。JIAはJAPAN SAFETYと題したブースを出展しました。タイ国のシリントーン王女様が大会を視察され、この日本ブースでは日本の耐震技術などをご説明しました。

6月に第1回関東甲信越支部大会を、テーマ「ここにあるタカラもの」のもとに群馬(前橋・高崎)で開催しました。3日間で延べ千人以上が参加し、「空き家空き地コンペ」では地域住民、自治体にもインパクトを与えた新しいコンペの形を提示できました。

9月のARCASIA香港大会では、2018年大会を東京に誘致することに成功しました。同大会では新たにミャンマーとブルネイの加盟が承認され、合計21地域の集まりとなりました。

10月に東京三会建築会議にて「東京構想ポスト2020」を発表しました。東京を人間が快適に住める空間として維持継承するため、「ひと」や「もの」をいかした「しくみ」をつくっていくことを大胆に提案しています。この構想を東京都都市整備局や都内の各自治体にも三会で説明しました。

年末は2017年度の予算作成を行いました。2015年度の114万円赤字決算を継続して予算を立てると赤字となるものでした。ここ数年は約300万円を取り崩しながら黒字決算としてきており、その結果地域活動運営費を15%も削

減してきました。JIAはボランティア団体ですので、企業とは異なり、活動をやめてしまえば決算はいくらでも黒字にできます。最近の社会はお金に関して過度に厳格になってきており、本来は人々の活動の潤滑油であるべきものが絶対的価値を持つようになってきたと感じます。その影響を最も強く受けるのが文化活動です。文化活動は清貧であっても、じり貧ではいけない。このような信念に基づき、地域活動運営費はこれ以上削減しないと9月の役員会で宣言しました。赤字予算そのものは決して良いものではありません。しかし、活動を維持発展させながら、黒字予算とするため根拠があまりない収入を増やすかを議論した結果、それでは決算も赤字になると危惧されました。

実際、2016年度も赤字予算でしたが、決算は黒字となりました。これは、皆様の活発な活動と努力により協賛金や事業参加費が増収となったためです。建築家が活動すれば社会は必ず良くなるという信念を持った人々がJIAの会員です。そのような会員の活動は社会的な価値はとても大きなものです。その価値の一部を対価として受け取れば、会の決算は必ず黒字になります。JIA事業は一般の人は参加費無料としているものが多いですが、活動を今後維持するためには一般の人の有料化やスポンサーをつけるということを原則とすることが必要であると考えています。そのような実績を重ねていけば、予算上も収入を増やしていけるのではないのでしょうか。

作成した2017年度赤字予算は多くの皆様からお叱りを受けていますが、このような考えについてご理解をお願いします。文化活動には公や民間のパトロン存在は重要で、お金の概念が大きく変化している社会においてJIAとパトロンとの関係についても今後議論が必要でしょう。

最後になりましたが、2016年度もこれだけ多くの活動を展開できたのも、会員の皆様の熱いパッションを支えていただいた協力会社の皆様、一般協力会員の皆様、各行事に参加していただいた市民の皆様、関連団体の皆様、そして我々の活動にご理解をいただいている行政の皆様の熱いご支援のおかげです。感謝を申し上げます。〈株式会社山下設計〉



タイ国のシリントーン王女様に説明(5月、タイ建築家協会ASAの大会)

総務委員会

委員長 榎本雅夫



入退会審査、会員集会等イベント準備、規約類から予算計画に関わるまで多岐にわたる課題検討、ワーキンググループ活動……総務委員会の仕事の多くは裏方に回るものだが、それらが会員活動の基盤となることへの責務を常に感じている。会員拡大WGではこれまで試行してきたベテラン会員による相談室の本格運用をスタートさせるとともに、勧誘チラシの配布を皮切りにジュニアおよび学生会員拡大の議論も進めている。Web改訂合同WGでは、ホームページを会員・社会との有益なインターフェースとするべく、2018年度の全面的な更新を目標に広報委員会リードのもと検討を進めている。今後の組織と活動のあり方についてさまざまな協議が進められる一方で、支部財政をいかに成立させて不安なく活動に専念できるのか、できるだけ具体的に検証を行ってゆく。〈株榎本建築設計事務所〉

広報委員会

委員長 高橋隆博



当委員会では、Web会議の導入に伴い、東京近郊に偏っていた委員構成から、支部大会もあったことから、群馬・長野の県域からの委員参加も得て支部全体の意識を高めての活動となった。

特筆すべきは、例年のミッションである会報誌『Bulletin』の発行、2つのWebサイトの運営、メルマガの発行を行う一方、それぞれの抜本的な検証と見直し、会報誌とHPの役割と住み分け等、2017年度の改革実行へ向け準備を進めた。具体的内容は次の通りである。

- 会報誌『Bulletin』／例年通り年7冊発行する傍ら、会報誌として、より充実&合理化&健全化とコスト削減に向けた検討と準備
- ・時代に則さない慣例の見直し(会報誌としての魅力とは)
- ・有料(収益)コンテンツの検討
- ・2017年より実行する季刊誌として再編の検証と計画
また、コスト削減に対して、
- ・慣例の発行部数の見直しによる印刷代の削減(余剰ストックの削減)
- ・印刷費の見直し(印刷会社数社での見積合わせ)による印刷費の削減
- ・編集委託費の削減(外部委託先の変更)。
- ホームページ／例年のミッションである2つのサイト(会員向けサイトと市民向けサイト)の運営とメルマガ発信といったルーティンの傍ら、「長年にわたり肥大化し混迷するHPの抜本的な見直しと維持費削減を図る」べく、更新作業を最小限に留める一方、種々の検証・検討を重ねた。下半期は、総務委員会と広報委員会合同の改定WGを立ち上げ、2017年度の実行作業へ向けた具体的な準備作業を行った(年度末より改革への実作業に着手)。〈株アトリエ秀〉

建築相談委員会

委員長 塩田純一



関東甲信越支部地域会相談室は5ヵ所の相談室で一般市民の身近な相談窓口として、74名で無料相談に対応しております。

2016年度の相談件数は下記の通りです。()は昨年度の数字です。

建築相談室	一般相談	トラブル相談数	相談件数	現地調査数
首都圏	46 (56)	165 (203)	211 (259)	31 (42)
神奈川	11 (15)	48 (50)	59 (65)	16 (7)
千葉	3 (2)	11 (3)	14 (5)	1 (0)
埼玉	51 (13)	9 (86)	60 (99)	2 (5)
群馬	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
合計	111 (86)	233 (342)	344 (428)	50 (54)

344件の相談のうち111件が一般相談、233件がトラブル相談でした。今年度もトラブル相談が約68%を占めております。これを受けてセミナーWGでは今年度も「消費者と建築紛争及び紛争解決の支援制度」というテーマでセミナーを開催し、広く一般市民に呼び掛けを行い、注意喚起しました。

委員会の活動

- ・(公財)住宅リフォーム紛争処理支援センターや東京都消費生活総合センターとの連携を継続しています。
- ・JIA建築会議でWeb会議および2016大阪大会へ出席し規約草案作成に参加しました。

WGの活動

- ・セミナーWGとAG(アーキテックガーデン)WGは、共同で6月18日にAGCstudioにおいて、「消費者が抱える建築紛争と紛争解決の支援制度」というテーマで、東京都消費生活相談員、住宅リフォーム支援センター支援部参事の方々を講師に迎え、51名の参加で開催されました。
- ・研修WGは、JIA関東甲信越支部建築相談委員会2016年度研修会を10月23日に大磯の吉田茂邸、大磯迎賓館、二宮の吉田五十八邸の見学・町歩きを行い、あしがら「いこいの村」にて交流会後1泊し、24日に東海大学教授杉本様、小田原木材業協同組合高木様を講師に迎え「県産材を使用した木造建築及び街おこし活動」をテーマに研修会を開催し、両日で21名が参加しました。〈株塩田設計事務所〉

保存問題委員会

委員長 安達文宏



保存・活用を通して文化を織りなす

建築文化の継承のみならず成熟した都市環境を育てるために、本年度も下記の活動をしました。

1. 定例委員会：月1回開催
2. 保存・活用要望書等の提出：①「神奈川県立近代美術館鎌倉館の保存活用に際して環境と屋外彫刻の継承に関する要望書」を提出(神奈川県知事宛、神奈川県教育長宛)
②「世田谷区本庁舎等整備にあたり前川國男設計の区民会館及び現庁舎並びに外部空間の継承へ配慮した計画業務進行プロセスの質の確保と透明化に関する要望書」を提出(世田谷区長宛、世田谷区議会議長宛)
③「衆議院憲政記念館(旧尾崎記念会館)の建築的・歴史的・景観的重要性を未来へ継承することへの要望書」を提出(内閣府宛、衆議院小委員会宛、憲政記念館宛、国立公文書館宛)
その後のフォロー：④数寄屋橋交番について関係者との協議や対応、⑤その他
3. 第1回支部大会2016群馬への協力：建築まちづくり、環境、災害対策、国際事業、保存問題の5委員会の一員として、23地域会発表をはじめ、各種企画・運営等への参加と協力
4. 問題の収集と対応：建物、まち並み、景観の継承にかかわる情報収集と要望書提出外案件についての所有者・JIA地域会・当委員会との意見交換
5. 見学会、シンポジウム等の開催・参加：①衆議院憲政記念館の見学会、②神奈川県立近代美術館鎌倉館の見学会等の実施
6. 理論合宿の実施：東京JIA館で11月12日開催。
7. JIA保存再生会議の活動：全国10支部で構成された会議の関東甲信越支部委員としての活動(JIA建築家大会2016大阪会議で、関東甲信越支部23地域会の保存再生に関わる活動を報告)
8. JIA文化財修復塾(JIA保存再生会議のWG)への協力
9. 近現代建造物緊急重点調査事業対応：文化庁、建築学会、建築士会連合会とJIAの協働事業への協力

(株)桑田建築設計事務所

苦情対応委員会

委員長 福富啓爾



苦情対応委員は、本会会員が設計監理を行った建物や行為に関して、建築主や一般市民から寄せられた苦情を扱う公益社団法人として重要な組織です。当委員会は寄せられた苦情に対し、情報の事実関係を確認し、本会会員がJIAの倫理規定および行動規範への抵触の有無を審議するもので、厳格な公平性が求められます。今年度は、幸い、当委員会にあげて審議する案件はありませんでした。しかし、JIAに寄せられた本会会員への苦情はかなりありました。

次年度は、当委員会の対応方法を最近の状況に合わせて再検討する予定です。建築家の活動は複雑化し、紛争が起きやすい状況にあるなかで、本会会員は苦情申し立てを受けないように緊張感をもって業務等に臨む必要があります。

〈R設計社〉

支部建築家資格制度
実務委員会

委員長 大川直治



当委員会は登録建築家の新規申請、更新申請、再登録申請の審査書類および更新要件等を確認した上で、支部認定評議会への審査資料作成を行っています。各審査と確認は委員のダブルチェック以上で行われ、疑問点は委員で討議を行って結論を求めています。2016年度は新規登録者49名、更新対象者195名中174名、再登録者23名が確定し、支部認定評議会を経て本部認定評議会に報告、提出されました。昨年度より正会員は登録建築家になるよう会則が変更となり、登録料とCPDの緩和措置があることも手伝い、昨年度に引き続き新規登録・再登録の申込者が例年に比べかなり増えました。その結果、当支部では正会員1,860名中894名が登録建築家となる見込みです。しかしこの数字は、支部正会員の半数を切る会員しか登録建築家になっていないことも表しています。登録の緩和措置は本年度で終了ですが、来年度以降もより多くの会員が登録建築家に申請するように広報をしていきたいと思えます。

〈大川建築都市設計研究所〉

クライアント支援委員会

委員長 中村高淑



WEBサイト「建築家に会おう—アーキテツファイル—」を通じて一般市民からの設計者選定の求めに応じ、システムに登録されている会員建築家を紹介するサイトの運営を行っています。

2016年度の実績は、新築戸建住宅の設計者紹介が1組という状況でした。2010年に発刊した『こんにちは、建築家です!』の読者からのご依頼でした。2007年の発足時から10年を迎えますが、内外の認知度が低迷しており、システム利用者が少ない現状です。今後は登録建築家制度と連動させるなど、システムや運営方法を見直し、運用実績を顧みながら、効果的なPR方法や存続意義についても考えたいと思います。

(株)中村高淑建築設計事務所



『こんにちは、建築家です!』
(2010年発行)

都市・まちづくり委員会

委員長 亀井尚志



2016年度もより良い景観・まちづくりに関する活動を行ってきました。建築・まちづくり委員会と共にJIAまちづくり会議を主導し、各地の新しいまちづくりの事例等の共有を行っています。また、谷中のHAGISOやBIMを活かしたまちづくりの取り組み等についてヒアリングを行いました。

9月には建設コンサルタンツ協会の長谷川会長と六鹿会長の会長対談も行いました。「土木と建築を取り巻く環境が多様化している現在、双方の協働は当然のように求められる」というお話がありました。

また、会長対談を受けて両会の協働シンポジウム「誰が景観をつくるのか 第10回」を開催しました。建築家の西村浩氏から、「縮退の時代に我々は何を考え、行動すべきか」というテーマで基調講演をしていただき、公共空間をどう活かすかが鍵であるという、まちづくりのヒントをいただきました。

(三菱地所株)



建設コンサルタンツ協会との協働シンポジウム

建築・まちづくり委員会

委員長 連 健夫



当委員会は、建築家の職域を広げる仕組みづくりの活動をしています。大切なのは、行政との良好な関係づくりですが、そのツールとして、

①行政向け「コンペ・プロポーザル支援リーフレット」を作成しました。これはコンペ実施への留意点をまとめたもので、JIAが支援できる組織であることを説明しています。理事会やJIAまちづくり会議を通して各支部、地域会に配布しました。

②「良質な建築・美しいまちづくり萌芽事例シート」を作り情報交換ができるようにしました。

会員への情報発信としては③「日本版CABEを考える」をテーマに『Bulletin』へ寄稿を続けています。

セミオープンな勉強会として、饗庭伸氏による「人口減少時代をデザインする都市計画」を実施しました。

支部大会で実施された前橋市での「空き家空き地コンペ」は継続性が求められるため、当委員会が群馬地域会と連携してフォローをしています。

(連健夫建築研究室)

災害対策委員会

委員長 中山信二



4月に発生した熊本地震被害では、嘉島町より要請のあった被害認定2次調査に、2名の先遣隊を派遣し、併せて10名のメンバーが支援活動を行いました。7月に都庁で開催された「災害復興シンポジウム」に災害復興まちづくり支援機構の一員として参加し、マンション災害対策Q&Aの執筆にも参画しました。

2016年度の活動の特徴は、6月の群馬大会や9月の災害復興企画セミナーなど他の委員会や住宅部会と横断的な連携活動を実施し、例年にない参加者の輪が広がりました。

当委員会は、非常時ばかりでなく事前復興という言葉に代表されるように、日常的に地域内の災害資源に関心を持ち、他団体や行政・町内会といった組織と連携して減災を目指す活動が社会から求められています。高齢化が進むJIA/地域会がその任に堪えられるのかが検討課題です。当委員会も当初のメンバーが入れ替わります。次期委員会では、地域会の活動の中にもどのように災害対策活動を位置づけて会員の参加意欲を高めていくか、検討をお願いしたいと思います。

(中山建築デザイン研究所)

国際事業委員会

委員長 高階澄人



国際事業委員会の2016年の主な活動は下記の通りです。
大阪大会で“Resilient Cities and Architectures”というテーマで「建築家とレジリエンスのある都市・建築・社会・それを支える技術」についての国際会議を国際交流委員会と開催しました。

タイ王立建築家協会との「若い建築家の交換研修プログラム」は4年目を迎え、今年度は第3期生として日本から1名・タイから2名を対象とした交換研修を実施。2017年度に向けての準備も整えました。

会員の海外進出を視野に入れた「海外アクションプログラム」についても国際交流委員会、JSBと協働を続けています。

2015年に続き、タイ王立建築家協会の2016年大会において、“Japan Safety”と題した展示を行いました。海外、とりわけアジア諸国より注目されている日本の高い設計技術や品質を、建設技術と併せて「日本の建築力」として紹介する試みを継続して展開していきたいと考えています。

また、2018年に東京開催が決定した〈ARCASIA大会ACA18 TOKYO〉に向け、国際事業委員会として協力をしていきます。
〈高階澄人建築事務所〉

環境委員会

委員長 寺尾信子



6月の第1回支部大会では「地域に根ざす建築作品・活動カタログ2016」と題して、まちづくり・保存問題・災害対策・国際・環境の5委員会の共同企画が実現しました。地域の建築作品や活動を1枚のPDFにより応募してもらった本企画において、環境委員会は幹事役を担いました。建築作品部門49点、活動部門22点、計71点が入選し、HPに現在も掲載中です。

一方、アーキテクトガーデンでは、「これからの土壁の家—現代人にとっての、住まい・まちなみを考える—」を「まちなかで土壁の家をふやす会」との共催で開催し、72名の参加により盛況でした。

さらに2月14日にセミナー「本当は教えたくないBIMテクとZEH/ZEBへの活用展望」を近畿支部・栗林賢次氏を講師に招いて開催し、今年度の行事を終えました。新年度はもっと充実させたい地域会との共催行事について、積極的に取り組む所存です。「環境関連の行事」を予定している地域会には、企画段階から環境委員会が協力をすることを伝えて、支部全体の活動の活性化を図りたいと考えています。

〈株寺尾三上建築事務所〉

アーバントリップ
実行委員会

委員長 藤吉秀樹



2016年度に実施した見学会の概要です。

- 第81回アーバントリップ(終日)(2016年6月13日)
テーマ：新緑の軽井沢へ～自然の中にたたずみ、自然を楽しむ名建築を巡る～
見学先：「北澤アトリエ(旧レーモンド 軽井沢スタジオ)」
「北野建設軽井沢営業所」設計：吉村順三
「Y邸」設計：坂倉建築研究所
「千住博美術館」設計：西沢立衛
- 第82回アーバントリップ(終日)(2016年11月30日)
テーマ：アーティストと職人～技術と発想
見学先：「サニーヒルズ」「岡本太郎記念館」
「東京都庭園美術館」
- 第83回アーバントリップ(終日)(2017年3月30日)
テーマ：「若手建築家による最新教会建築3題を訪ねて」
見学先：「茅ヶ崎シオン教会」「湘南キリスト教会」
「東戸塚教会」

建築家以外の参加者を増やす努力をしており、毎回数名一般の方が参加されています。また、JIA未加入者への積極的な勧誘も行っています。
〈藤吉秀樹建築計画事務所〉

建築セミナー実行委員会

委員長 山梨知彦



本年度のテーマは、「見て、聞いて、建築を感じる」として、受講生は30名、実行委員は委員長、ワーキングスタッフを含め10名、そして、例年通り多くのOBの助けを借りて運営した。

年間を通してのプログラムは以下の通り、9プロジェクトで24講座とした。

1. 巨匠が生み出した今を生きる名建築
2. 大人のアドヴェンチャー：大谷石採石場を巡る
3. AIと人がつくりだす未来の環境
4. ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展と現在
5. 伝統の先にあるもの—木造建築の未来
6. 建築家は自邸に何を託すか？
7. 根ざす建築
8. 日本を飛び出す若き建築家達
9. 茶碗師が茶室を作った

各回出席率も良く、本年も活性化できたプログラムとなった。
〈日建設計〉

JIAトーク実行委員会

委員長 阿部 勤



JIAトークは、日新工業株式会社の後援のもと、2016年度も4回開催いたしました。建築家会館の照明器具も今年度には一新され、より良い講演環境を得られています。

また、講演はさまざまなスタイルで実施されました。第1回は音楽家・小西康陽氏によるDJプレイとラジカメトーク、第2回はフードアーティスト・諏訪綾子氏のレクチャー、第3回はアーティスト・BAKIBAKI氏と委員の掛け合いトークやライブペインティング、第4回はグラフィックデザイナー・廣村正彰氏のレクチャーでした。

参加者も年々増えてきており、さらに来年度は充実を図っていきたく思っております。

〈アルテック〉



BAKIBAKI氏による
ライブペインティング
(写真撮影：蔵プロダクション)

学生デザイン実行委員会

委員長 杉山英知



第25回東京都学生卒業設計のコンクール2016

2016年度のコンクールは、2016年5月28日(土)、29日(日)に芝浦工業大学芝浦キャンパスを会場に行いました。今回は20大学46作品(1作品辞退あり)が一堂に会し、その光景は圧巻でした。5月28日(土)には公開審査が行われ、審査過程を見ようと延べ200名近くの来場者を集めました。

審査委員長には山本理顕氏を、副審査委員長に三谷徹氏を、審査委員には城戸崎和佐氏、山代悟氏、末光弘和氏を迎えて開始しました。長時間の審査を経て、金賞、銀賞、銅賞、審査員

特別賞の8作品を選出いただきました。

また、第25回を迎える本会を記念し奨励賞として実行委員会賞を設け、今回は2作品を選出しました。

〈スタジオエイチ級建築士事務所〉



全国大会用ポスター

大学院修士設計展 実行委員会

委員長 佐藤光彦



「大学院修士設計展」は第15回目を迎えることができました。参加校も増加傾向にあります。2012年度よりWeb展を継続しつつ、図面と模型を展示する展覧会を開催し、建築家の単独審査による審査、講評を行うこととしています。

また、展示作品と審査・講評、各大学の研究室紹介を取めた作品集が総合資格学院の協賛を得て、刊行される予定です。

次年度も、これまで以上に事前周知を充分に行い、本展覧会が学生、大学教員、建築関係者、市民を結びつける活動に発展することで大学院教育に少しでも寄与できればと考えています。

会場設営に当たった実行委員および学生のみなさまの協力には、この場を借りて御礼申し上げます。

〔展覧会〕

会 期：2017年3月21日～23日

会 場：芝浦工業大学芝浦キャンパス8階

審 査 会：2017年3月22日

審 査 員：長谷川逸子氏

参加大学：24大学(27専攻)

出 展 数：45作品

〈日本大学理工学部／佐藤光彦建築設計事務所〉

アーキテツツ・ガーデン 実行委員会

委員長 鈴木利美



アーキテツツ・ガーデン(AG)2016は、6月から7月にかけて支部全域で10のセミナー、2つの展示、7つの街歩き・見学会、そして初の支部大会「建築祭2016群馬」も開催された。ただ、初の支部大会開催のためにAG委員会主催による主イベントは開催しなかった。

延べ参加人数は支部大会を除いて≒700名。支部内では、長年にわたる毎年恒例の行事としてすっかり根付き、楽しみにされている方達も多い。

今後も、社会に向けた建築文化の普及と建築家職能・JIAの活動をアピールする場として続けていきたいとの思いで、年度後半はAG2017に向けて企画、準備を始めた。

〈ダンス建築研究所〉



アーキテツツ・ガーデンのパンフレット

支部大会 2016 実行委員会

委員長 上浪 寛



第1回JIA関東甲信越支部大会「建築祭2016群馬」
ここにあるタカラもの—建築まちづくりの七転び八起き—

2016年6月10日(金)～12日(日)の3日間、第1回支部大会が群馬で無事開催することができ、内外から好評価を得ることができました。会員、非会員合わせて延べ1,000人以上の参加者を迎えることができ、特に最終日の群馬音楽センターでは700名前後の参加者となり大変盛況な大会となりました。

大会の3ヵ月前からは「空き家空き地コンペ」「建築家カタログ」といった一般公募を行いました。これらを進める過程で地域に根付いた専門家が地元自治体、市民、行政と連携し成果を上げた結果、地方都市開催の支部大会として成功したと考えています。



支部大会の準備・開催を通して普段の各委員会活動にも反映していければ、これらのコンテンツはJIAのタカラものになると実感した大会でした。

〈株構想建築設計研究所〉

交流委員会

委員長 河野剛陽



主な活動としては、まず10月21日に泉カントリークラブにおきまして、「フレンズカップ」を開催いたしました。昨年度の反省を踏まえ、正会員の参加が少し増え71名の参加となりました。新しい試みとしてグループ対抗戦も企画されました。

また、翌週の27日からの「JIA建築家大会2016大阪」の“法人協力会サミット”に参加しました。関東甲信越支部からは15名が参加。例年通り各支部の報告や意見交換が行われました。各支部とも環境は違いますが、いろいろと工夫をして活動しているようで、刺激になりました。

最後に3月8日に“交流大会”を開催。2016年度の交流委員会活動報告に続き、藤沼支部長との懇談会においては、正会員と協力会員のかかわりかたに関するお話をいただき、来年度以降のARCASIA東京大会、JIA建築家大会東京、支部大会千葉の取り組みに関して考えるきっかけになったと思います。

その他、「教えて協力会員」の普及の方法を議論したり、協力会員募集のチラシを総務委員の会員拡大WGに協力いただいて作成したりと順調に活動できたと思います。

来年度は、さらに他の委員会、部会と協力して、何かできればと考えています。

〈IAO竹田設計〉

●委員会一覧 (2016年度)

総務委員会	委員長：榎本雅夫
広報委員会	委員長：高橋隆博
・ Bulletin 編集WG	編集長：八田雅章
・ ホームページWG	主査：高橋隆博
建築相談委員会	委員長：塩田純一
・ 首都圏建築相談室	
・ 神奈川建築相談室	
・ 群馬建築相談室	
・ 埼玉建築相談室	
・ 千葉建築相談室	
保存問題委員会	委員長：安達文宏
苦情対応委員会	委員長：福富啓爾
支部建築家資格制度実務委員会	委員長：大川直治
クライアント支援委員会	委員長：中村高淑
都市・まちづくり委員会	委員長：亀井尚志
建築・まちづくり委員会	委員長：連 健夫
災害対策委員会	委員長：中山信二
国際事業委員会	委員長：高階澄人
環境委員会	委員長：寺尾信子
アーバントリップ実行委員会	委員長：藤吉秀樹
建築セミナー実行委員会	委員長：山梨知彦
JIA トーク実行委員会	委員長：阿部 勤
学生デザイン実行委員会	委員長：杉山英知
大学院修士設計展実行委員会	委員長：佐藤光彦
アーキテクト・ガーデン実行委員会	委員長：鈴木利美
支部大会2016実行委員会	委員長：上浪 寛
交流委員会	委員長：河野剛陽

神奈川地域会

代表 飯田善彦



2016年度は「Think Local Act Global」をスローガンに掲げて3年目、横浜市に続く藤沢市との連携協定(防災)の締結、横浜市新市庁舎デザインレビュー他多くの活動を試み展開してきました。それなりの成果はあげたものの、やはり、市民との接点、神奈川プラットフォームの活用という意味で例年行っている建築祭を見直し盛り上げようと考え、柳澤潤副代表を中心に、企画のさらなる充実と集客、おまけにJIA神奈川会員の増加まで見込む魅力満載の内容を立案実行しました。

初日は入選茶室の組み立て、防火帯建築群の研究展示、建築を武器に街に切り込む若手4人のシンポジウム、横浜市建築局長も加わり深化したデザインレビューの2本立て(およそ180人の聴衆)、2日目は子供ワークショップ、船のツアー、卒業設計コンクールに連動した神奈川7大学指導教員によるトークセッション、3日目は茶室審査、卒業設計コンクール審査に加え今回初回となる、JIA神奈川会員を対象とするデザインアワード審査(参加53名、審査委員長伊東豊雄氏と2015年新人賞2人による審査、なんと新加入会員9名)と目白押しで、最後のパーティーで全ての入賞者を表彰し大いに盛り上がりました。

これからも、より多くの市民参加を念頭に、充実を図ってきたいと思います。
 〈株飯田善彦建築工房〉

千葉地域会

代表 榎本雅夫



「継続と成長」をキーワードに、積み重ねられてきた実績の継承と内容を更新、より市民に開かれた活動を目指した。主たる活動を記す。

●市川街並みウォッチング(4月23日)

歴史的な建築から最新のものまで、新旧が混在する市川の街並みを散策。

●第14回安心安全百科講習会(8月10日)

「空き家を活かす」と題し、空き家にかかる法整備や行政面での対応等について千葉県県土整備部の協力のもと実施。

●第4回千葉県建築展(11月12日～13日)

「地域に生きる」と題し、千葉県内で活躍する建築家による作品展示、内藤廣氏と金箱温春氏を招いての講演会、地元で活動する建築家によるパネルディスカッションや住宅作品発表会、千葉大学と近隣小学校の協力で実現した子どもワークショップ等。

●視察研修旅行(11月25日～26日)

栃木、福島、茨城方面を巡った。

●第2回新年講演会(1月16日新年会と併催)

千葉大学柳澤要氏による講演会「海外の学校建築と旅の風景」。

●第29回千葉県建築学生賞(3月10日～12日)

県内大学、工業高校の卒業設計作品の展示・プレゼン+公開審査・表彰を通して学生達の活躍を支援。
 〈株榎本建築設計事務所〉

埼玉地域会

代表 鶴崎健一



事業につきましては、3つの柱をもって活動しました。

1つ目は主たる活動で、建築および建築家と地域社会での住文化を結ぶ「埼玉住文化研究」、2つ目は「他団体協働推進活動(特別事業)」。

埼玉県内で活動する団体等に会員が参加・協働することで地域交流をし、プラットフォーム化、フォーラムの構築の活動をします。3つ目は公共団体のイベントへの参加・協力です。

1. 住文化研究活動

「人の心が物をつくり必要なものとし残り継ぐことが住文化」とし、建築はその住文化を建築と読み替えその文化を担う上で重要であると定義しています。そこで、研究は私たち建築家に身近な「建築」を地域(埼玉)社会における住文化として位置づけし、社会的財産として検証することとする「住文化と建築」。その建築を創造する職能をもつ地域の建築家に焦点をあてて「住文化と建築家」の2つのテーマをもって研究する活動としました。

2. 他団体協働推進活動(特別事業)

住まいや建築をテーマに埼玉県内外で活動している団体のプラットフォームづくり、フォーラムの構築の為に企画立案、イベントの参加、講師派遣、施設の管理など、さまざまな形で他団体と協働しました。

3. その他

さいたま市主催の「さいたまトリエンナーレ」文化芸術活動への参加・協力。さいたま市主催の「さいたまふるさとふれあいフェア」の市民交流への参加・協力。
 〈ツルサキ設計〉

茨城地域会

代表 河野正博



「地域と共に」

茨城地域会の本年度の主な活動を簡単にご報告いたします。

2016年9月25日には、水戸市の中心市街地で「水戸まちなかフェスティバル」において恒例の水戸市の地形模型に自由に建物を作ってもら参加型ワークショップ「みんなで水戸のまちをつくっちゃおう」を開催しました。今回5回目となるこのイベントですが、例年と同様に開場前から子供たちの行列ができる人気で、イベント終了まで列が途切れることはなく大盛況でした。

11月25日には北茨城市において関東甲信越支部の「第2回地域サミット」が開催されました。支部内会長方々には遠くまで足を運んでいただきありがとうございます。会議では白熱した議論がなされました。また、エクスカッションにおいて北茨城市の観光地をご案内でき嬉しく思います。この地は東日本大震災で大きな津波被害を受けた地域です。現在では、津波により流された五浦美術研究所(六角堂)も復元され、徐々に復興が進んでいます。福島に近いこともあり「風評被害」のある地ですので、他の地域の方にお越しいただけたのは地域の方々にも喜ばれました。

その他、茨城県消費生活センターで月2回の住宅相談、建築学会関東支部茨城支所による「町並みウォッチング」の共催など、他団体と連携して活動しています。
 〈株河野正博建築設計事務所〉

栃木地域会

代表 阿久津新平



地域の団体・個人との交流や県内の建築家を志す学生との交流を通しての地域づくり活動が恒例的事業です。

最初の事業は、AGの1事業として7月に「建築見学ツアー」を学生・一般県民・会員14名参加で開催しました。「まちなみ景観賞を受賞した大谷石の街並み見学会」と題して、イタリアの田舎を思わせる小さな大谷石蔵を巡るツアーを実施しました。

次は11月開催の、23回目となる学生と会員参加の「スクールin栃木」です。今年は「市民活動とまちづくり」と題して那須塩原市(旧黒磯市内)においてまちづくり活動を実施しているワークショップに参加し、その活動を体験しました。

年度末事業は、卒業設計コンクール「栃木クラブ賞」の実施です。県内4校から7作品が選ばれ、その中からグランプリが決定しました。昨年から、特別招待審査員の他に特別審査員をJIA地域会の外から招いての公開審査とし、盛況裡に幕を閉じました。

最後に支部事業の「第11回北関東甲信越学生課題設計コンクール2017」・「第20回群馬クラブ学生卒業設計コンクール2017」に実行委員と審査員として3名参加しました。

〈睦和建築設計事務所〉

群馬地域会

代表 飯井雅裕



2016年度は、まず6月に関東甲信越支部第1回支部大会が前橋・高崎で開催され、ホスト地域会としての活動がスタートとなった。支部大会のテーマ「ここにあるタカラもの」をその後の地域会活動に引き継ぐこととし、県内各所で視察や研修会を行い、それぞれの地域・エリアの持っている固有の文化・歴史・風土から建築を見つめ直す場を設けた。

9月に県内北毛地域(中之条・渋川)の見学会「北毛タカラガシ」を開催し、温泉建築や養蚕農家群、農村歌舞伎などの建築視察を行った。11月には少林山達磨寺にて「建築学校」を開催し、視察報告と勉強会を行うと共に座禅や洗心亭でのお茶会を行うなど、メンバー研鑽の場を設けた。3月には1年間の活動紹介とメンバーの作品展示を行う「まちなか建築展」を高崎の「Caféあすなる」で開催し、支部再生部会の「今、ある良い建物をこれからも使い続けていくために」のセミナーやメンバーによる「ギャラリートーク」を行った。

その他、CPDセミナーを2回開催し、また交流活動も積極的に進め、県内建築関連6団体と共に第5回「ぐんま街・人・建築大賞」の顕彰活動を行い、3月には第11回北関東甲信越課題設計コンクールと第20回学生卒業設計コンクールを開催した。

〈飯井建築設計事務所〉

山梨地域会

代表 長田孝三



年初の事業計画に基づき下記の活動を実施した。

●山梨県高校卒業設計コンクール：高等学校建築学科4校が対象であったのだが、今年度から対象は3校となり、建築を学び建築関係の仕事に就く生徒も減少している。建築の楽しさ・面白さを感じ、学業の励みになればとの思いで実施している。

●建築見学会：丹下健三氏設計の山梨文化会館の耐震改修(免震レトロフィット)工事の見学会を開催。また、網野隆明会員による耐震改修・復元設計のワイン醸造会社の主屋やワイン蔵の見学会で、木造伝統建築の耐震改修手法を学んだ。

●山梨建築展の開催：甲府駅北口の県立図書館にて建築展を開催。甲府駅前の舞鶴城南側のまちづくりを「お城ふろんと」を考えると題し、模型とパネルによって提案。会員の作品パネルや模型、JIA紹介のパネル展示も行った。

地域会運営に係る中で考えることは、同業他団体との差別化やJIAの特色の顕在化・認知の拡散でした。他団体でも会員の減少



山梨文化会館耐震改修見学会

に悩み、実効的な策を見出せない中での活動や会員の減少に伴う運営費の不足はJIAにとって永の課題です。今後のJIA、山梨地域会のカタチについて十分に方向性を示せず己の力不足を感じています。

〈株イズ〉

長野地域会

代表 山口康憲



2016年度から2年間で、将来を見据えた会の改革と新たな事業の可能性を模索することになりました。当会では事業は基本的に各委員会が担当して行っていますが、今までの縦のピラミッド型の構成から、なるべくフラットで会員一人一人が責任を持って運営する方向を目指しています。

広報の内容を見直し、HPと年4回発行の会報の役割を明確にしました。8月にリニューアルしたHPは来訪者数が飛躍的に増加しました。昨年2回開催し好評だった「環境セミナー」を発展させた「信州“準寒冷地温熱教室”」を6回シリーズで開催し、のべ450名の参加を得ました。4月14日に発生した熊本地震では2015年に改訂された被災認定調査における唯一の経験者である当会から2名を派遣し、調査活動開始時のリード役を果たしました。恒例の夏のセミナーは7月30日にかつて千国街道(塩の道)の宿として栄えた大町市の見学を行い、冬のセミナーは12月17、18日の両日、当会としては2回目の県外視察となる岐阜県の建築を巡る研修を行いました。2月25、26日に手塚貴晴・由比両氏を迎え第11回建築祭を開催しました。松本市美術館との共同開催は今年が最後で、来年度からはJIAの単独開催になります。この他にもさまざまな活動を行っていますが、行政との対応では、3月には長野県とJIAを含む建築五会で災害時の住宅相談活動の協定を締結しました。

〈株アーバー建築事務所〉

新潟地域会

代表 小川峰夫



2016年度事業計画に基づき、以下の活動を実施した。

●第19回大学卒業設計コンクール2017

県内4大学から12作品が参加した。特別審査員に末光弘和氏を迎え、約100名の聴衆の前で公開審査を行い、審査員合議の上各賞を選定した。なお審査会の間に末光氏による「風のかたち、熱のかたち、建築のかたち」と題した環境シミュレーションを活用した設計方法論や作品についての講演会を実施した。

●第12回学生課題設計コンクール新潟県内発表会

県内の建築系教育機関(高校、大学、専門学校)から約50名が集まり、長岡造形大学で開催された。このコンクールは、県内の建築系学生・教員、JIAメンバーに交流の場を提供し、学生の建築に対する向上心を高めてもらうことを目的としている。

●第11回北関東甲信越学生課題設計コンクール

審査員による作品パネルと模型の読み込みの後、投票により上位得票者を確認し、その後公開審査の中で合議により各賞を決定した。今回は、高校の部で新潟勢の活躍が目立った。また審査会前日には藤村龍至特別審査委員長による「Architecture as prototype」と題する講演会が行われた。

●創作研究会「ぶらっと富山～富山の建築とYKK ap施設群の見学」

協力会員であるYKK apさんの協力により前沢ガーデンハウス、前沢パシブハウス、パシブタウン黒部等の施設群と富山の最新の建築を見学した。
(アーキセッション)

中野地域会

代表 小西敏正



区政へのパイプ

1. 区民の参加を募って、「まち歩き」東中野～青梅街道史跡めぐり(AG参加)を実施。
2. 支部大会(群馬)の23地域会発表会に、サンプラザとブロードウェーの中野のアイデンティティへの貢献を「中古かヴィンテージか」のキーワードで発表。
3. 中野地域会リーフレットが完成。
4. 毎年恒例の区民参加のバスツアーを東京建築士事務所協会中野支部と共催。今回は「水郷の町 香取市佐原をめぐる」と題し香取神宮、佐原のまちを見学。
5. 新宿区落合第六小学校において、空間ワークショップを実施。
6. 建築設計者対象勉強会「環境講演会2016 もう知らないでは済まされない改正省エネ法完全施行への対応」を寺尾信子氏と松永潤一郎氏を講師としてお迎えし実施する。講演会終了後、講師も交えて忘年会。
7. 中野区の区役所・サンプラザ地区整備計画に関して区長あて、区民会議宛ての要望書、区議会宛ての陳情書を提出。陳情書は採択される。区政へのパイプとなるか。
8. 支部長へ「第3回地域サミット中止の経緯説明と今後の開催方法についての意見集約についてのお願い」を提出。
(建築環境デザイン研究所524)

三多摩地域会

代表 高田典夫



まちづくりという視点から…

三多摩地域会といえば「空間ワークショップ」です。2005年から始めた授業の一環としての空間ワークショップは、11年目に入って、今年度は、武蔵野市・八王子市・多摩市・東村山市・杉並区などの公立小学校8校で実施することができて、どの学校も毎年恒例の学校行事となってきました。

三多摩地域会は、広範囲にわたるエリアを対象としているため、それぞれの会員が関与している地域で「その地域に根ざした」活動を行って、会としては、それらの活動に対するサポートを行うこととしていますが、この空間ワークショップの活動も含めて、情報の共有などネット上で十分用は足りるこの時代に、あえて「場」を共有することにこだわった僕らの活動は、これからのまちづくりの一つの方向を示しています。場を共有し、協働して成果をあげる地域に根ざした活動は僕たちの原点であり、地域の関係者の共感を得て地域に根付いてきました。これからも継続的に活動していきたいと考えています。

(アトリエテン・実践女子大学)

杉並地域会

代表 林 美樹



今年の土曜学校も昨年に引き続き、空き家をテーマに開催。より具体的な活用の方法を探りました。

1) JIA 杉並土曜学校

年間テーマ:「あれ?おや!こんな使い方!?~地域に開く空き家・空き地活用術~」(参加者数はパネラー含む)

第1回「杉並・空き家・空き地活用フォーラム」(6月18日)

JIAアーキテクト・ガーデン2016参加 パネラー:齊藤志野歩、竹之内祥子、樋口容子、村上讓、矢田浩明、参加者:46名
第2回「解決!空き家と待機児童~保育ママさんの小さな保育所~」(9月10日)

パネラー:大木ひとみ、尾崎佳代子他、参加者:56名

第3回「空き地と高齢者~近所につくろう〈みんなの家〉」(11月19日)

パネラー:入倉遼平、鈴木ひとみ、森安みか、参加者:36名

第4回「あれ?おや!こんな使い方!?完結編~やぼろじ(空き家)とはたけんぼ(空き地)のころみ~」(2月18日)

パネラー:すがいまゆみ、和久倫也、参加者:34名

2) 杉並建築会 大会

「荻窪の、むかしといまとその先へ」として、10月15日、「荻外荘」「中央図書館」「まちなみ」の大きく3テーマでまち歩き&ワークショップを行いました。
(Studio PRANA)

新宿地域会

代表 小倉 浩



2016年度の新宿地域会の活動は下記のとおりであった。

- 1) 会員増強のための名簿の作成と連絡網の整備はメンバーリストの整備とメンバーの追加(累計35名)としてお膳立ては終了したが、若手の参加が今一つの出席状況であるので次年度の課題と捉えている。
- 2) 建築設計専門家として行政へ働きかける場合の基盤として新宿設計三会を設立するため、士会新宿支部の設立に協力し年度内に発足した。新年度より三会同会の会合を企画する予定であることを踏まえ、東京都建築士事務所協会 新宿支部、東京建築士会 新宿支部の総会後の懇親会に参席させていただいた。
- 3) かねてより作成中の区内の建築マップ作成については、2016年度内に印刷へ回したので、新年度より各方面へ配布を開始する。引き続き東京オリンピック2020の訪日客の役に立つよう英訳版の作成に着手する予定である。
- 4) 行政との連携強化については、JIA新宿地域会の存在を認知してもらう必要があり、今までより一歩踏み込んだ働きかけをした結果、区の公式行事への参加依頼、区が平成28年度に策定を予定している「(仮称)新宿区建築行政マネジメント計画」について、区の建築行政や施設管理についての意見提出を求められ、これに応えた。
- 5) 今期、東京地域連携会議議長を順番制ということで新宿地域会が引き受けて感じたことは、地域サミットと連携会議との明確な位置づけが成されない限り、連携会議のメンバーのモチベーションは下がる一方という危機感を感じている。
(株)小倉設計

城東地域会

代表 岸 成行



4月にまち歩きを企画した。根岸子規の会主催のまち歩きに城東地域会が協力し、門前仲町から深川まで案内役を務めた。東京海洋大学のキャンパスから芭蕉記念館の見学まで、いつもと違う俳句や文学に視点を向けた新鮮なまち歩きになった。そして、5月に開催された東京都学生卒業設計コンクールに協賛した。学生の意欲的なプレゼンテーションに刺激を受けた。来年度以降の協賛についても継続の予定である。さらに、東京地域連携会議にて、各地域会にコンクールの支援を呼びかけた。6月の関東甲信越支部群馬大会では、空き家空き地コンペに地域会奨励賞を提案した。空き家の問題は地方に限らず、城東地域でもかかえる問題である。私たちの呼びかけに他の地域会からも賛同を得て、コンペ審査会に参加した。受賞者の千葉大学4年生幕田早紀さんが、7月の城東地域会例会でプレゼンテーションを行った。また、中央地域会と共催し、例年通り中央区立城東小学校にて子供空間ワークショップを開催。他の小学校でも子供空間ワークショップを定期的に開催したい。9月からは、まち歩きマップ作成準備を始めた。従来からある建物の案内マップではなく、町の成り立ちや地域の文化、景観等の視点からマップを作成する。手始めに、台東区南部の調査を行った。2017年度にまとめる予定である。
(株)総合計画研究所

文京地域会

代表 野生司義光



文京地域会では文京区の他会のメンバーと共に「NPO法人文京建築会」を2016年の秋に立ち上げました。それによりまして、これまで以上に建築・まちづくりに関連した職能の向上を目指すとともに、会員相互の交流と親睦をはかり、その社会的責任に基づき地域社会に貢献することを目指しています。そこでは、建築家の目を通して「文京ブランド」を可視化・顕在化し、より良い「文京らしさ」の醸成に寄与すること、あわせて会員はもとより、会員以外の建築人の方々や区民、行政、専門家とも文京区という地域を舞台に共に活動し、交流を深めており、現在もさまざまな活動が行われ現在も継続・展開されています。おもな活動内容について下記にご紹介いたします。

●文京区見どころ・絵はがき大賞

文京区には、優れた自然や都市景観、また祭りやイベントなどが数多くあります。こうした文京区の魅力を紹介する「絵はがき」を公募し表彰しました。行政とも協働し地域の人々とのつながりある活動の場となっています。2017年度で7回を数え、区民の方々にも定着した感があります。

●文京建築会ユース

2月に羽田空港国際線ターミナルにて浴場組合の銭湯文化の海外発信に展示協力致しました。

●文京区との協定

「建築の専門家が文京区の防災対策、復興まちづくり等を支援するための協定」を区とむすび、現在は区との情報交換会を設置し意見交換を行っています。
(株)野生司環境設計

渋谷地域会

代表 南條洋雄



今期も引き続き新会員の獲得を目標に「学ぶ会」と「語る会」を軸に活動した。照明デザインを「学ぶ会」を2回、専門メーカーを招いて行った。今年は建材メーカーや総合電気メーカーを会友として迎え、さまざまな製品情報を学べる例会を目指している。

また「スウェーデン建築事情」と題して、若き日にヨーロッパに渡り設計活動を続けている渡辺満氏の「語る会」を開いたほか、参加者全員が語るCHI-CHATtingを7月と1月に開催した。これはプレゼンターが10枚の画像を200秒以内で語る会だが、1月例会では榎文彦・三井所清典両顧問、長谷部健渋谷区長らの参加を得て大盛況だった。渋谷区防災ネットワークでの活動もかなり具体化しており、9月の総合防災訓練(防災フェス)では応急危険度判定のデモンストレーションを行い、また応急危険度判定員連絡会や防災拠点ごとの機材点検にも各



1月例会で「語る」長谷部健渋谷区長

登録メンバーが参加した。通常例会は、毎回必ず会員の誰かが作品を発表するなどして、会員の親睦に努め、参加することが「楽しく役に立つ地域会」を心がけている。
(株)南條設計室

世田谷地域会

代表 柿崎豊治



- ・ 定例会は原則第3金曜日18時から開催しています。
- ・ 区内小学校5校での空間WSおよび士会主催WSへの支援参加をしました。
- ・ 世田谷区民会館および区庁舎の保存再生に向けた活動を継続。9月に連続シンポジウム「半世紀を迎えた世田谷区民会館区庁舎Part5」を開催。12月に支部長、保存問題委員長、地域会代表連名で世田谷区長および区議会議長宛要望書「世田谷区本庁舎等整備にあたっての前川國男設計の区民会館及び現庁舎並びに外部空間の継承に配慮した計画業務進行プロセスの質の確保と透明化に関する要望」を提出。12月頃から区民有志の2団体と連携、区庁舎等整備に関する区議会議員との懇談会に参加、また一般区民対象の前川國男建築ツアーに解説者として参加するなどして同区民会館および庁舎の建築的、文化的価値をアピールする活動を行いました。
- ・ 行政との連携
世田谷区建築物安全安心協議会に参加。世田谷区の依頼により「耐震化、不燃化、建替えなどの区民相談窓口」を開設。
- ・ アーキテックガーデンへの参加
国分寺崖線周辺を巡る街歩きを企画。世田谷区のまちづくり行政の特色ともなっている「世田谷区地域風景資産」を線的につないで、各活動区民団体の解説を聞きながら、まちづくり風景づくり活動への理解を深め、交流を図りました。〈アルコ建築設計事務所〉

千代田地域会

代表 太田安則



東京の中心千代田区は、日本を代表する官庁街、ビジネス街、古書店街、電気街、スポーツ用品や楽器に特化した商店街、大学キャンパス、庶民の職住のまち・神田など、多様な街並みを有し、また、グローバルな波に首都として変化し続けています。千代田地域会は、この現状を将来にどう継承するかを共通認識として、公益的な活動に取り組んでいます。

11月には、「景観まち歩き調査」や「千代田を舞台にした学生設計展」などの活動と新しい研究テーマをジョイントして、千代田区に集積された歴史遺産や地形を含む都市景観を、「都市の基層」というテーマで、景観要素、地形、交通などの都市インフラ、生活や歴史文化まで総合的に捉えるワークショップ型「総合展」を、区役所1階ロビーで開催しました。「多層な視点をまとめたパネル展」「千代田を舞台にした7作品の設計展」「地形模型」で構成し、「ギャラリートーク」では加藤耕一東大准教授と地域会パネラー、また会場の参加者が意見交換を行いました。歴史的建造物、景観の保存活動として、「衆議院憲政記念館」の文化的歴史的的使命保存要望書を関係機関に提出しました。千代田区とは「災害時における応急対策活動に関する協定」の履行のため連携を深める一方、会員の資質向上のため、会員および有識者による「公開メンバーズトーク」を行っています。〈一級建築士事務所 Y・O まち・空間コンサルタント〉

中央地域会

代表 小田恵介



- 教育活動 こどもワークショップ
第7回空間ワークショップ(城東地域会と共催)。
2016年7月2日 中央区立城東小学校 城東ひろば
城東小学校は東日本大震災を受けて、ワークショップ前の6年生の図工の時間に、家の耐震構造について構造建築士が授業を行っている。当日は講堂の中で、4班に分かれて、5年6年生26人が共同で作品を構築した。校舎は震災復興小学校として1929年建設されたが、すでに再開発が決定されている。今年のワークショップは仮設校舎で実施される。
- 地域交流活動
2012年11月より、JIA保存問題委員会との協働で、「三原橋センター」の解体に際して各種の意見交換会を重ねた。2015年に解体されたが、資料のアーカイブ化のため資料整理を推進中。
- 会員交流活動
2016年6月に中央地域会設立10周年記念会を杉浦英一事務所で開催。杉浦英一は中央地域会の初代表を務めたが、2013年に56歳で急逝。現在は奥様の杉浦美智が事務所を継続している。杉浦作品の多くの模型に囲まれた会議室で故人を偲んだ。その後、月例会は会員の事務所視察を兼ねて実施し、現在までに7つの事務所を訪問して会員相互交流を深めた。
〈東西建築サービス(株)〉

城南地域会

代表 松本 裕



城南地域会も設立から満10年になりました。これまでに、「城南散歩」は16回、「アーバントリップ」は10回、「城南・ふれあいフォーラム」は6回開催。品川、大田両区の行政とは多岐にわたり意見交換をしてきました。今までの活動を列挙します。
「城南散歩」は、「品川・大田のウォーターフロントを探る」、「旧東海道を歩く」、「呑川を歩く」、「下町の町工場と住宅混在地域と多摩川を歩く」、「品川木密地域を歩く」、「立会川を歩く」、「目黒川を歩く」、「品川区木密地区を歩く」、「大田区木密地域を歩く」、「都道29号品川区を歩く」、「都道29号大田区を歩く」、「大田区木密地域を歩く」、「南北崖線大田辺を歩く」、「南北崖線品川辺を歩く」、「立会川の歴史を辿って」、「大森から羽田の旧海岸線を辿って」、「大森海岸から品川宿まで海岸線を辿って」。
'16年度「内川の源流を訪ねて」。
「アーバントリップ」は「金山町の街づくりと酒田市の建築を訪ねて」、「八ヶ岳から信濃路へ」、「富山と立山連峰」、「伊那、飯田、木曾」、「東工大大岡山キャンパス」、「東日本大震災視察」、「千葉県を訪ねる」、「秩父方面を訪ねる」、「16年度「茨城県を訪ねる」、研修会を兼ね「栃木、日光、桐生を訪ねる」。
「城南・ふれあいフォーラム」は「金山町の街づくり」、「品川・災害に強いまちづくり」、「誰でも知りたい生活し易い安全なまちづくり」、「まちづくり「常盤台しゃれ街」事例研究、品川、大田の歴史変遷「まちづくり変えるもの変えられないもの」。
'16年度「みちとまちづくり」都道29号と木密地域、商店街の影響。 〈松本建築設計事務所〉

城北地域会

代表 柴田知彦



地域会活動の中心は、1) 地域会誌『KNIT』の発行、2) まち歩きやセミナーの開催、3) 空間ワークショップの開催でした。

地域会誌『KNIT』の編集を通じて、城北地域を俯瞰的に捉え、各区に共通するものや固有の事象を改めて検証する機会としています。前回の特集は保存や利活用でしたが、最新号は「緑」を切り口に地域の建築家ならではの視点から、まちの魅力を発信するものです(6月に発行しました)。まち歩きは、あえて城北地域を離れ、暗渠となった旧河道を巡り、地域の景観が地形や歴史、文化と深く関わることをテーマにしたものです。空間ワークショップは、3回のうちの2回は他校での開催を見学された先生からの開催要請であり、昨年度からこの傾向が続いています。また、地域会会員以外の方にもファシリテーターとして協力していただきました。多様な活動の展開ができた1年でしたが、これまで同様、いろいろな側面から地域と地域会のありようを模索した1年でもありました。

〈執筆：鈴木和貴／PAX建築計画事務所〉



『KNIT』表紙



空間ワークショップ

目黒地域会

代表 木村丈夫



2016年度は、恒例の「街かどトーク」の第5回、第6回を開催した。毎回建築分野に限らず幅広い分野からゲストをお呼びし、多彩なお話をうかがっています。

6月の第5回はアーキテックガーデン参加プログラムを兼ね、「目黒区長が語る目黒の街づくり」と題して建築家会館に青木英二区長を迎え、安心安全なまちづくり、緑被率の向上、これからの公共建築の在り方、景観行政などについて区の方針をうかがった後、参加者との質疑応答が行われた。区都市整備部の方々も出席され、JIAの存在を行政の方に知っていただくための良き意見交換の場となった。

11月には、「世界と日本の自転車交通の今」と題し、「建築家クラブ」にてNPO自転車活用推進研究会理事長の小林成基氏のお話をうかがった。“自転車は車両”という認識で整備されているヨーロッパの街路の実例紹介は、日本の道路交通行政がいかに遅れているかを知らされ、質問が尽きず、終了後も懇親会の場で熱いトークが続いた。第5回、第6回のトーク内容は、建築家教育推進機構の助成を得て、JIAのHP上でビデオ配信されています。

〈タオアーキテック〉

港地域会

代表 今井 均



2016年度は恒例のMASセミナー(一般市民参加型セミナー/建築家クラブ)が2度の開催となりました。第22回6月「景観と屋外広告」は宮田多津夫会員担当。23回は「2020年東京オリンピック・パラリンピックをきっかけに何ができるのか」は連健夫会員担当。セミナー数名の会員がパネリストとして登壇するのはMASセミナーのやりかたです。テーマに沿ってパネリストの意見が発表されたところで、一般参加者よりの意見があり、会場が一体化する状態となります。参加者の年齢層も高齢の90歳から小学生までとその幅も広いことから、極力平易な言葉を心掛ける必要があります。その後の懇親会でさらに個別に会員と参加者によるディスカッションが盛り上がりを見せます。地域会での毎月の例会ではMASセミナーのテーマとその内容について最も時間をさいています。〈株創建築アトリエ〉



●地域会一覧(2016年度)

	県名	地域名	代表者
1	神奈川	神奈川地域会	飯田善彦
2	千葉	千葉地域会	榎本雅夫
3	埼玉	埼玉地域会	鶴崎健一
4	茨城	茨城地域会	河野正博
5	栃木	栃木地域会	阿久津新平
6	群馬	群馬地域会	飯井雅裕
7	山梨	山梨地域会	長田孝三
8	長野	長野地域会	山口康憲
9	新潟	新潟地域会	小川峰夫
10	東京	中野地域会	小西敏正
11	〃	三多摩地域会	高田典夫
12	〃	杉並地域会	林 美樹
13	〃	新宿地域会	小倉 浩
14	〃	城東地域会	岸 成行
15	〃	文京地域会	野生司義光
16	〃	渋谷地域会	南條洋雄
17	〃	世田谷地域会	柿崎豊治
18	〃	千代田地域会	太田安則
19	〃	中央地域会	小田恵介
20	〃	城南地域会	松本 裕
21	〃	城北地域会	柴田知彦
22	〃	港地域会	今井 均
23	〃	目黒地域会	木村丈夫

デザイン部会

部会長 山本想太郎



「アートと建築」を部会テーマとして、活動展開しています。例年多彩なゲストを招いた公開イベントを行っています。本年度は建築から都市へと対象を広げ、アート表現とまちづくりの関係についてのシンポジウム「まち+アーティスト+建築家」を開催しました。地域に根ざしたアートイベントなど、まちづくり・アート・建築にまたがって実際に活動を行っているパネラー3名により、その難しさと可能性、リレーショナル・アート論などについて議論が展開されました。パネラー：本間純（アーティスト）、伊藤嘉朗（建築家）、山本想太郎（建築家）。

〈山本想太郎設計アトリエ〉



左から本間純氏、伊藤嘉朗氏

都市デザイン部会

部会長 鈴木和貴



●セミナーや見学会の開催

- ・ サウンドスケープデザイン／音を切り口としたデザイン活動
- ・ 瓦考／瓦職人から学ぶ瓦の魅力と最新技術
- ・ 国際会議の報告と世界の環境建築の最新情報
- ① Energy Forum on advanced Building skins / Bern
- ② PLEA (Passive & Low Energy Architecture) / LA
- ・ 部会員による3コマスライド発表(夏編・冬編)

●研修旅行

- ・ 甲州市塩山や南巨摩郡周辺の登録有形文化財や伝建地区～甲府市周辺の藤村式学校建築群～由比宿・蒲原宿の旧東海道～中島ガーデン(1泊2日) (PAX建築計画事務所)



研修旅行(上条観音堂：塩山下小田原上条集落)

住宅部会

部会長 宮島 亨



2016年度住宅部会は、40周年を迎えた前年度より引き継ぎ、建築家の役割や職能について掘り下げて議論することを活動方針とさせていただきます。

そんな中、9月2日には「災害」という切り口から建築家の社会的役割を考えるシンポジウム「建築家の職能と住民参加型の震災復興を考える」を支部災害対策委員会と共催いたしました。他にもアメリカ広葉樹輸出協会との共同企画の見学旅行で、飛騨高山に行きました。他支部住宅部会との連携も年に2回開催されることが恒例となっており、6月に郡山で、10月には建築家大会と合わせて大阪で行われました。 (V建築設計室)



シンポジウム「建築家の職能と住民参加型の震災復興を考える」

メンテナンス部会

部会長 今井章晴



メンテナンス部会は、今年で30周年を迎える。これを記念しマンションメンテナンスの先駆者の話を聞き、変遷を調べ整理し『マンションの大規模修繕30年の軌跡』として編纂した。また、毎月開催しているセミナーでは、国土交通省や東京都など行政の方を講師にお招きし、最近のマンション政策についてご講演いただくとともに、部会員の改修事例や、築後100年を超えたニューヨークの超高層ビルや建物など研修報告をした。

耐震総合安全機構(JASO)と協力し、熊本地震に被災調査団を2度にわたり派遣し、非木造建築物を中心に被害記録と提言を『くらしつづける街と建築へ』という書籍にまとめた。

〈ハル建築設計〉



『マンションの大規模修繕30年の軌跡』



30周年記念大会 セミナー風景

住宅再生部会

部会長 宇佐美 潔



既存の木造住宅を守りたい

今回の住宅再生部会有志の旅は少々苦い旅だった。2016年10月、京都で久しぶりに美しい桂離宮、国宝待庵、藤井厚二設計の聴竹居を堪能して熊本に向かった。熊本の益城町は昨年4月の熊本地震の爪痕が半年経っても生々しく残っていた。命を失った人、命は助かったが家を失った人、建てたばかりの家が倒壊した人。こんなことがあつては命が助かってまともに生きていけない。既存住宅の耐震性能をもっと高めなければと思った。

2017年1月に「住宅再生耐震研究会」を発会し、2月に第1回目の住宅再生耐震セミナーを開催した。来年度は「生命・暮らし・財産を守る」住宅再生の実践を目指したい。

〈宇佐美潔建築計画工房〉

益城町の被災した木造住宅
(2016年10月17日撮影)

情報開発部会

部会長 天神良久



情報開発部会は法人協会員Gグループと合同で、月に1回部会・勉強会を開催しています。主なテーマはIT系(CAD、CG、情報通信)と、時の技術動向に関する勉強会が中心です。講師をお呼びしたり、会員内から新情報を発表してもらったりしています。2016年度の勉強会では、「スマホのアプリで業務の効率アップ!」、「PPP (public-private partnership : 官民連携) の手法と事例の紹介」、「【日本の森林】から【バイオマス発電の資源】へのエネルギー革命—」、「(株)エスエスのご紹介と竣工写真の現状」、「建築保全とデータベース」を開催。

見学会では12月に「国立近現代建築資料館：建築と社会を結ぶ大高正人の方法」を実施しました。

新会員は随時募集中です。JIA関東甲信越支部のホームページに「勉強会」のお知らせを掲載しています。ご興味の方はお気軽に部会・勉強会を覗いてください。〈榊ヶー・デー・シー〉



忘年会 (神楽坂にて)

建築交流部会

部会長 観音克平



建築交流部会は、「建築」を通じてさまざまな交流を図ることを目的として活動を行っています。

2016年度は、活動の中心のひとつである「建築見学会」を中心に、秋には「弘前市見学会：前川建築・近代建築・黒石市内」の見学会も実施しました。これについては、『Bulletin』に部会活動報告準備中であります。3年にわたり続けてきた、前川國男の設計監理の勉強会に続く、まとめの活動でもありました。地元東北JIA会員とも交流し、深く楽しく見学することができました。

「建築家のメモ」展については、500点に上る保存パネルと「建築家のメモⅠ」「建築家のメモⅡ」の在庫本の活用も含め、次の展開に向け調整を行っております。

今後も部会員相互の積極的な「交流」を中心に、JIA会員、非会員にかかわらず、広く交流の輪を広める活動を目指しています。皆さまの積極的なご参加をお待ちしております。

〈アトリエ・アーキポスト〉

建築家写真倶楽部

部会長 藤本幸充



写真家 中川道夫氏とめぐる横浜の隠れた歴史撮り歩き

—水の中の都市、横浜「関外」旧吉田新田エリアを巡る—

前年度の中川氏の講演に続き、2016年度は外に出て、横浜「関外」—横浜の「関内」駅の南側に広がるエリアを氏の案内で巡った。

以前は入海でそこを江戸時代、埋め立てたのが吉田新田。明治期にはその水田も埋め、都市化が進み商業地として栄えたが関内から移った遊郭もあり、戦後は売春や麻薬、外国人風俗のエリアが点在した。戦時中は爆撃から逃れるためのガード下が売春宿になり、今日撤去されて、コンクリート打ち放しや、リン酸処理亜鉛メッキの外壁などモダンな建物がガード下に挿入されている。しかし緊張のあまり思わずカメラを隠して通りたくなるディープな境界が今でも残っている。

世界の歴史的都市が変化してゆく様を中川氏は撮り続けているが、今回参加者も氏の過去と今の世界にたっぷり浸かった。

〈株鎌倉設計工房〉

再生部会

部会長 柳沢伸也



再生部会は、歴史的に価値ある建物を長く使い続けていくために、毎月、さまざまな検討会を行っています。関東甲信越支部所属ですが、全国的に活動していますので、興味ある方はどなたでも大歓迎です。

2016年度は、約3年間にわたる東京弁護士会歴史的建造物部会との共同研究「既存建物を使い続けるための諸制度見直し研究」の総まとめを行い、『今、ある良い建物をこれからも使い続けていくために』というパンフレットを発刊しました。建築基準法第3条の規定をうまく利用すれば、我が国でも欧米諸国のような基準や方法で歴史的建築物の保存活用が実現できることを提示しています。

また、建築家大会2016大阪では、近畿支部保存再生部会の協力により、「近現代建築再生の課題」というテーマでシンポジウムを開催し、多くの反響を得ました。

2017年度は、こうした研究会に加え、レクチャーや見学会など積極的に行っていきたいと考えています。

〈やなぎさわ建築設計室〉

ミケランジェロ会

部会長 富安秀雄

執筆者
事務局 阿部一尋

4月に皇居東御苑で江戸城天守台・桃華楽堂(1966年(昭和41年)・今井兼次設計)・富士見櫓・二の丸庭園のスケッチ会を実施。10名が参加した。

6月～7月の4週間、新宿西口プロムナードギャラリーでアーキテクト・ガーデン協賛の展示会を開催。18会員が56作品を市民に向けて展示。

11月に築地本願寺(1934年(昭和9)・伊東忠太設計)・旧聖路加病院棟(1933年(昭和8)・レーモンド等設計)・勝どき橋(1940年(昭和15))等のスケッチ会を実施。7名が参加した。

〈一級建築士事務所 みらい〉



築地本願寺スケッチ

金曜の会

部会長 日高敏郎



2016年度は毎月1回計12回の企画を行いました。第2回目の連続講座は建築家内藤廣氏を招聘して全6回開催し、設計活動を通して体験した設計自体を根底で動かしているものや問題点に焦点を当てたテーマで大変興味深く、毎回100名前後の参加をいただきました。

また、2016年度は「木造」をテーマとして4月に安藤直人氏、6月に腰原幹雄氏、2月に山本長水氏をお招きし、森林と建築を俯瞰したお話、高層木造耐火建築とその将来について、そして実際の純木造建築作品紹介などを行いました。来期以降も機会を見つけ続けたいと思います。

最後になりますが、12月に行った「前川國男の現代における意味—没30周年を迎えて」は全国から参加者があり、高い関心を集めました。このような企画も折に触れて企画していきたいです。

〈日高敏郎建築設計事務所〉

学芸祭部会

部会長 大川宗治



学芸祭部会は、協力会員も含めたJIA会員同士の交流という目的のもとに活動しております。

2016年度は、毎年恒例であった「新年の集い」においてのBGM演奏はメンバーの都合が合わず行いませんでした。

今年は多くの会員が交流できるような活動を考案していきたいです。

〈一級建築士事務所 OM-1〉

●部会一覧 (2016年度)

デザイン部会	部会長：山本想太郎
都市デザイン部会	部会長：鈴木和貴
住宅部会	部会長：宮島 亨
・市民住宅講座WG	
・暮らし・住まい・環境WG	
・規約検討WG	
・安全・防災WG	
・木構造WG	
・住宅というものづくりWG	
メンテナンス部会	部会長：今井章晴
住宅再生部会	部会長：宇佐美 潔
情報開発部会	部会長：天神良久
建築交流部会	部会長：観音克平
建築家写真倶楽部	部会長：藤本幸充
再生部会	部会長：柳沢伸也
ミケランジェロ会	部会長：富安秀雄
金曜の会	部会長：日高敏郎
学芸祭部会	部会長：大川宗治

2017年度 活動方針



関東甲信越支部
支部長
藤沼 傑

昨年6月の総会にて支部長を拝命いたしまして、早くも1年が経過しました。この1年は群馬での第1回支部大会に始まり、9月には香港で2018年ARCASIA東京大会決定、10月には東京建築三会で東京構想POST2020発表など、いくつかの主要事項がありました。同時に、各地域会、各委員会では従来通りの多くの活動が展開されました。

特に、東京の地域会は設立されてから約10年が経過し、行政との関係が強固になってきた地域会が増えるなど、着実な成果が出てきていると感じています。

私は2004年にJIAに入会し、2007年から国際委員会やIPD-WGなどの活動を始めて、今年で10年となります。支部長となる前は、支部全体の課題に関してそれほど意識していませんでしたが、この1年間でいくつかの課題が見えてきました。

- 本部、支部、地域会の役割分担
- 東京のアクティブ会員の負担
- 行政との連携
- 新規会員

特に最後の新規会員の問題は、JIAに大きなパラダイムシフトが必要と感じています。情報がこれだけ氾濫している社会において、JIAのような団体活動におけるボランティア概念が世代間で大きく異なっていると感じます。

既存の委員会等の活動単位は60歳以上が主体となっているため、若手の意見は通りづらく、かつ実際の作業分担は若手に多く集中するというのが、若手の率直な感想です。従来は、団体を通して入ってくる情報が多いので若手は辛抱できましたが、現在はJIAで活動しなくてもいくらかでも情報が入手できる時代です。このような状況下では、もっと自由に活動できる場が見えてこない限り、若手会員が積極的にJIAに参加してこないでしょう。まずは、この若手が活動する場を確保することを今後の活動方針とします。

関東甲信越支部には2,000人以上の会員がいましたが、現在は約1,800人、団塊の世代が70歳以上となる2020年以降は1,500人以下となります。このような急激な会員数の減少は、現在行われている各種活動に大きな影響をもたら

すものと思われます。JIAは建築家の職能団体として存続しなければならないと考えています。この団体を2020年以降も存続させるためには、JIAの平均年齢61歳以上の会員の最大かつ唯一のミッションは若手育成であると言っても過言ではないと思います。61年以上の経験を次世代に伝えていくのは簡単ではなく、何年もかかるでしょう。つまり、70歳を過ぎてたとえ現業を離れても、若手育成をミッションとするJIA活動はぜひ継続していただきたい。現業を離れても、JIAは退会しないで下さいと先輩会員をお願いします。

本部・支部・地域会の役割分担は首都圏を含む関東甲信越支部固有の課題です。首都圏で活動している会員は、国を動かそうと考えていますので、支部の委員会の役割を再度整理する必要があります。

行政との連携は多くの地域で進んでおり、他会とも連携しながら行政との作業が増えています。他方、地域によっては行政との関係が深くない地域会もありますので、他の地域会と情報共有を促進していきます。設計者選定において、設計者を限定する動きが出てきています。基本的には地域会が行政に協議をしていただきたいと思いますが、支部としても他の事例紹介など、できる限りの支援はしていきます。

東京はこの10年で地域会が多く設立され、14もの地域会があります。アクティブ会員は本部、支部、地域会の複数の役割を担っている人が多く、その負担を整理する必要があります。今年度中に東京地域会の新たな方向性をまとめたいと考えています。

以上をまとめますと、今年度支部活動主要方針は下記となります。

- 他会と共に社会に発信する
- 若手を育成する
- 支部内の情報連携を強化する
- 委員会や東京の地域会負担を整理する

今年度は国土交通省の告示15号改訂作業もあり、会員の実態をしっかり反映させていくことも重要です。また、最後になりましたが、2018年のARCASIA+全国大会を準備する年でもありますので、皆様のご協力よろしくをお願いします。

2016年度 関東甲信越支部総会の報告



総務委員長
榎本雅夫

5月18日に開催された通常総会の概要をご報告します。

開会に先立ち、出席正会員62名・委任状出席者543名、合計出席者605名。支部規約第9条3により正会員数1,809名の10分の1以上であることから本総会が成立する旨、浅尾事務長より報告された。

■議長団および議事録署名人の選出

藤沼傑支部長のご挨拶後、議長に渡邊顕彦幹事長、副議長に進藤憲治副幹事長、議事録署名人に高橋隆博、森暢郎両会員の2名が指名され、議事が開始された。

■第1号議案 2016年度事業報告承認の件

榎本雅夫副幹事長より報告があり、その後採決を行い、賛成多数で承認された。

■第2号議案 2016年度収支決算承認の件

浅尾事務局長より報告があった。収支が黒字となった主な理由として、全体として多くのイベントや委員会収支が黒字、もしくは予算より赤字を減額した結果である旨説明があった。金子修司、東條隆郎両監査役による監査報告の後採決を行い、賛成多数で承認された。

■第3号議案 支部役員選出規約改正の件

藤沼支部長より、役員定数を役員会で変更できるよう改正することにより、会員数が減少する中、今後の議論により柔軟な対応が図れるようにするとの趣旨説明があった。その後採決を行い、賛成多数で承認された。

■第4号議案 支部役員及び支部監査選任の件

浅尾事務局長より、幹事16名監査1名を選任する件について説明があり、その後採決を行い、賛成多数で承認された。

■報告事項1 2017年度活動方針について

報告事項1および2について藤沼支部長より以下の説明があった。各地域会各委員会でも多彩な活動を広げている。支部における情報連携を効率化して社会に対する発信、活動を充実させていく支部運営を心掛け、公正な設計者選定に関する活動を含め、今後やらなければならないことをもう一度見つめ直す年にしたい。

また、来年のARCASIA 東京大会に向けてどのような大会にするか、これから本格的に議論してゆきたい。

■報告事項2 2017年度収支予算について

約400万円の赤字予算となっているが、今後できるだけ収入を増やす一方、支出削減に努める。財政は厳しいが活動を止めてはいけない。抜本的な財政見直しの検討を進め、2018年度から持続的な黒字化を目指す。

報告事項に対し、赤羽吉人会員より監査を行う立場からの発言があった。基本的に赤字予算というのは間違っており、黒字化のための方針を出した上で、具体策をできるだけ早期に監査に示すとともに、予算の執行状態の適時把握・コントロールをしてほしい。乗松隆専門会員からは、会員を増やす意味で、他の団体との交流、若い世代に対する発信力を高めてほしい。西勝郁郎会員からは、支部運営費の本部・支部割合の再検討、顧問報酬、公認会計士による本部監査について本部理事会で審議してほしい。支部追加運営費について、活動に応じてバランスを考えたらどうか。本部協力金の支出は止めてよいのではないか、との意見が出された。

議長より、以上をもって総会の議案がすべて終了した旨発言があり、支部総会が閉会となった。

総会終了後、「JIA支部活動について」と題して会員集会が開催された。前半、豊洲市場問題について、市場問題プロジェクトチームの佐藤尚巳氏からの説明、また、松下副支部長より、ポスト東京五輪の首都展望についてお話しいただいた。その後、藤沼支部長より、地域会および委員会活動の今後の在り方についての検討状況、慶野副支部長より財政合理化に関する概要説明があった。ただし、これらに関して会員との意見交換の時間が確保できず、再度集会等の機会を設ける方向となった。



総会



会員集会

第28回 JIA 神奈川建築WEEK かながわ建築祭2017

テーマ

まちの楽しさ・面白さを考えよう

日時：2017年2月24日(金)～2月26日(日)

会場：横浜市開港記念会館、みなとみらい線馬車道駅コンコースなど

今年の「かながわ建築祭」は「まちの楽しさ・面白さを考えよう」というストレートなわかりやすいタイトルをつけました。シンポジウムや公開審査、大学生の卒業設計コンクール、茶室コンペ、ポートで街歩き、こどもワークショップなど、今年は何のイベントも人の集まりが良く、最後のCross×Crossパーティーまで大勢の方々と賑わいました。展示にも多くの方が足を止めてくれたようです。こうして無事成功裡に建築祭が終了できたのも、JIA会員のみならず横浜市や総合資格の方々をはじめ大勢の皆さまの協力の賜物だと思っています。改めて感謝申し上げます。来年度以降も本年度同様活気のあるJIA 神奈川地域会のイベントにするために、役員一同今から試行錯誤していきたいと思います。

以下に、今年の「かながわ建築祭」の様子をご報告します。



2017年
かながわ建築祭
実行委員長
柳澤 潤

2月24日(金)

シンポジウムⅠ

「まちの楽しさ、面白さを考えよう」¹

17:30～19:00
横浜市開港記念会館1号室

第一部は「プレゼンテーション まちを楽しく面白くする試み」と題して、4人のクリエイターにこれからのまちの楽しさや豊かさを見出す方法や仕掛け方をプレゼンテーションしていただきました。第二部は登壇者4名に西田司氏(JIA 神奈川・オンデザイン代表)を加え、トークセッションを行いました。登壇者：斉藤精一氏(ライゾマティックス代表)、宮部浩幸氏(スピークス代表/近畿大学准教授)、古澤大輔氏(リライト代表/日本大学専任助教)、岡部祥司氏(ハマのトウダイ代表) 司会：柳澤潤(JIA 神奈川副代表/コンテンポラリーズ/関東学院大学) (柳澤 潤)



1



1

シンポジウムⅡ

「建築祭デザインレビュー」²

19:30～21:00
横浜市開港記念会館1号室

4月に催した横浜市新市庁舎の2回目、基本設計が終了した段階で特に市民利用領域がどうなったかを横総合計画事務所の福永知義氏、寿町市営住宅+福祉会館を小泉雅生氏、子安小学校を山本理顕氏に発表していただきました。その後、横浜市建築局長にも参加していただきトークセッションを行いました。今までにない刺激的な内容のためか、合計180人ほどの聴衆が集まりました。(飯田善彦)



2

2月25日(土)

参加型イベント

「ちがった視点でまちを見る 船による街歩き」³

10:00～12:00
大岡川、中村川

参加者、横浜市道路局橋梁課の方、説明者の総勢27名。横浜市の橋梁保全計画の諮問委員の伊東孝先生にも参加いただき途中の説明をお願いしたり、山下町の霞橋の見学も盛り込みました。(笠井三義)



3

参加型イベント

「子ども空間ワークショップ」⁴

13:00～15:00
馬車道駅コンコース

180cmと90cmの角材とジャンボ輪ゴムで、子どもたちの夢の家を作製。参加者8名と合計15名のファシリテーターとで、スケッチから始まり、見事な建築作品「結晶ドーム」が完成しました。(桜本将樹)



4

シンポジウムⅢ

「卒業設計の傾向と解説 2017」⁵

17:00～19:00
馬車道駅コンコース

毎年行われている卒業設計コンクールに合わせ、参加大学から7名の教員をゲストに卒業設計をテーマにしたトークイベントを開催。教員の目線で各大学の設計教育を軸に話してもらいました。(西田 司)



5



開催期間中、馬車道駅コンコースで
さまざまな作品展示を行いました。



第1回「JIA神奈川デザインアワード」作品展示
3日目の審査会に先立ち、各エントリー作品(53作品)を展示しました。



「卒業設計コンクール」作品展示
迫力ある作品パネルや模型を展示



「防火帯建築展・復興橋梁展」
横浜の都市資産を見つめ直す展示



「近代建築展」
横浜と神奈川の近代建築をパネル展示



「茶室デザインコンペティション」
最終審査に残った作品を実施展示

2月26日(日)

公開審査

「卒業設計コンクール 審査」⁶

9:30~16:00
馬車道駅コンコース

神奈川県内の7大学から選抜された32作品が集まり公開審査が行われました。今年の審査員は野沢正光氏、西村浩氏、保坂猛氏、永山祐子氏の4名。午後からは上位8作品から金銀銅の3作品を選定する討論会が行われましたが、各作品とも優劣が付け難く、会場では決まらないという異例な結果となりました。(安田博道)



参加型イベント

「馬車道茶会」⁷

11:00~15:00
馬車道駅コンコース

2011年から「交流」をテーマに開催されてきた建築祭で「一番小さな交流のかたち」として二帖茶室のデザインコンペが始まり、その入賞したデザイン茶室の中で茶会が行われてきました。馬車道茶会は2014年から馬車道駅コンコースで開催されていて、2017年で3回目を迎えました。(青木恵美子)



公開審査

第1回「JIA神奈川デザインアワード」1次審査・公開審査⁸

13:00~17:30
馬車道駅コンコース

JIA神奈川地域会は、このプラットフォームに属する建築家を対象として、建築、インテリア、プロダクト、まちづくり、地域計画、専門分野の研究、教育、さまざまなボランティア等々、分野、内容の区別なく、秀でた業績、活動を顕彰するために「JIA神奈川デザインアワード」を制定。かながわ建築祭2017にて、この第1回が開催されました。審査委員長に建築家・伊東豊雄氏を迎え、審査員には2015年のJIA新人賞を受賞した建築家2人、河内一泰氏、柳澤潤氏に加わっていただき行われ、白熱した議論の末に最優秀、優秀作品が選ばれました。(井上玄)



公開審査

「茶室デザインコンペティション」⁹

14:00~15:00
馬車道駅コンコース

4回目となる今回は応募総数103案。テーマは第1回から変わらず「一番小さな交流のかたち2帖の茶室」でした。コア審査員はJIA神奈川代表 飯田善彦、室伏次郎、堀越英嗣、青木恵美子の4氏で、ゲスト審査員として鈴木伸哉氏(横浜高速鉄道代表取締役)を迎えました。一次審査は1月11日に開催し、優秀3案は「かながわ建築祭」の会場に作成して、公開最終審査をしました。(山口賢)



表彰式+懇親会

「Cross × Cross パーティー」¹⁰

17:30~19:00
馬車道駅コンコース

建築祭期間中に行われた3つのコンクールの表彰式が行われました。また、この建築祭に関わった100名を超える方が参加し、3日間を締めくくる温かく盛大な懇親会になりました。(清水智津子)



第15回 JIA 関東甲信越支部 大学院修士設計展 2017

展覧会：2017年3月21日～23日
会場：芝浦工業大学芝浦キャンパス8階



大学院修士設計展
実行委員長
佐藤光彦

「大学院修士設計展」は2016年度で15回目を迎えることができました。従来この企画は、関東甲信越地区の大学院より優秀な修士設計作品を2点まで推薦していただき、Web上に掲載するというものでしたが、第11回よりWeb展も継続しつつ、修士設計のパネルと模型を実際に展示する展覧会を開催しています。さらに建築家の単独審査による審査、講評を行い、優秀な学生と作品を顕彰することとなりました。これまで審査員には楨文彦氏、伊東豊雄氏、坂本一成氏、富永譲氏を迎え、今回は長谷川逸子氏にお願いしました。第12回からは、参加作品および審査、講評、シンポジウム内容、各大学の研究室紹介を取めた作品集が、総合資格学院の協賛を得て、刊行されています。このように、本展覧会はこの数年で大きな変貌を遂げ、参加校も増加傾向にあり、関東甲信越地区で修士設計を行っている大学のほぼすべてから出展されています。

他の修士設計展と異なるのは、出展作品が自薦ではなく各大学からの推薦であり、さらに大学院で修士設計の指導を行っている委員が主体となって運営しているところにあります。大学から推薦されることにより、各大学が修士設計をどのように指導しているかを知ることができます。卒業設計とは異なり、修士設計にはリサーチに基づいた研究と、そこから導き出される仮説の立案およびその検証を経たデザインの提案が求められますが、大学によって方針の違いはあります。かつて、大学院に修士設計というものは無く、いまだに論文のみという大学

もあります。修士設計を論文に相当する修了要件としてどのように位置付け評価するか、各大学で試行錯誤してきた時期もあります。それゆえ、何をもって修士設計に足るのかという問いに戸惑う学生たちも多いように思います。この展覧会では、「修士設計」のあり方を問い続け、これに立ち向かう学生たちの道しるべとなることも意図しています。

次年度も、これまで以上に事前周知を充分に行い、本展覧会が学生、大学教員、建築関係者、市民を結びつける活動に発展することで大学院での指導に少しでも寄与できればと考えています。会場設営に当たった実行委員および学生たち、会場を提供していただいた芝浦工業大学、協賛いただいた総合資格の皆様ほか関係者の協力には、この場を借りて御礼申し上げます。

- 第15回 大学院修士設計展2017 概要
展覧会：2017年3月21日～23日
会場：芝浦工業大学芝浦キャンパス8階
審査会：2017年3月22日
審査員：長谷川逸子
参加大学：24大学27専攻 出展数：45作品
Web展：<http://www.jia-kanto.org/shushiten/>

- 大学院修士設計展2017 実行委員
佐藤光彦（日本大学理工学部、委員長）
谷口大造（芝浦工業大学、副委員長）
赤松佳珠子（法政大学）
今村創平（千葉工業大学）
佐藤誠司（バハティ一級建築士事務所）
鈴木弘樹（千葉大学）
安原幹（東京理科大学）



展示会場



審査会

第11回 JIA 北関東甲信越 学生課題設計コンクール 2017

2017年3月25日(土) 藤村龍至氏(審査員長)特別講演会
2017年3月26日(日) コンクール審査会
会場：前橋工科大学



学生課題設計
コンクール 2017
実行委員長
鈴木 弘

第11回 JIA 北関東甲信越学生課題設計コンクール 2017・第20回 JIA 群馬クラブ学生卒業設計コンクール 2017が今年も開催されました。

出展した学生たちはもちろんのこと、学生たちを指導された各学校の教職員の方々および会場構成にあたった前橋工科大学の学生の方々、そして会場を提供していただき、さらに多方面からご協力いただいた前橋工科大学の関係各位に対し厚く御礼を申し上げます。

JIA 北関東甲信越学生課題設計コンクールは、北関東甲信越(山梨・長野・群馬・新潟・栃木・茨城)の6県の大学・専門学校・工業高校の建築設計の授業課題に対する作品を対象に開催しています。卒業設計とは異なり最終学年以外の学生が集まることから、学生たちは他の学校の建築学生の活動を窺い知ることができ、互いにその後の学習活動の刺激になっていると聞いています。また、出展した学生の後の就職や進学に役立つツールとして当コンクールでの評価を活用することも期待されます。

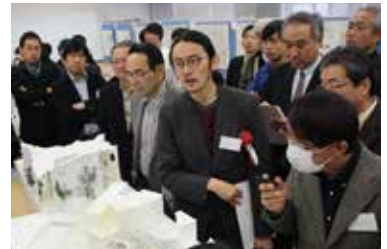
併催する JIA 群馬クラブ学生卒業設計コンクールは、群馬県内の建築系大学の卒業設計コンクールとして開催しており、優秀な作品は全国学生卒業設計コンクールへと進みます。

当コンクールも第11回を迎え、回を重ねるごとに新たな課題を抽出し、また反省を活かしながら運営してきました。毎回の実行委員会の最大の課題は「審査員長の選任」です。出展した学生達が評価を受けてみたいと思うような方を候補とさせていただき、年度末の忙しいスケジュールを調整して審査員長を依頼するという中々ハードな課題です。今回は、幸いにして学生や若い建築設計者などに絶大な人気がある藤村龍至氏が快く審査員長を引き受けてくださいました。

コンクール前日の3月25日には、藤村龍至氏による特別講演を開催し、大変多くの学生や建築関係者が集まり熱気を帯びた熱い講演が行われました。

翌3月26日のコンクールでは、藤村審査員長に加え藤沼支部長と北関東甲信越6県から1名ずつを審査員と

し、公開で審査を行いました。審査に先立ち、出展した学生が自分たちの作品の前に立ち、審査員にプレゼンしました。その場で繰り出され



学生プレゼンと審査員質疑

る審査員の辛辣な質疑に苦戦しながらも必死に答えている姿に若い世代への期待を感じました。

その後会場を移し大講義室で公開の審査会を行いました。公開の審査では闊達な議論が交わされ、さらに学生に追加の質疑応答が行われました。

金賞・銀賞・銅賞・支部長賞・各地域会賞に選出された学生も、惜しくも漏れた学生も、自らの作品が公開で審査の俎上にのり、意見やアドバイスを受けたことは、今後への貴重な宝物になったと思います。また白熱した議論は、参加した学生のみならず、目の当たりにした会場の方々や我々にとっても、今後の建築を考える上で非常に示唆に富んだ議論でありました。

表彰式では、藤村審査員長による審査員長特別賞のサプライズ発表も行われました。その後のサンドウィッチパーティでは緊張感もほぐれ、藤村審査員長を囲んでの写真撮影や他の学校の学生同士の交流など、和気藹々とした雰囲気の中で盛況の内に本年度のコンクールを終了することができました。

次回以降もより充実したコンクールとなるように当実行委員会は精一杯尽くすつもりではございますが、今後も関係各位のより一層のご協力をお願い申し上げます。



終了後に全員で集合写真

中国 福州市視察

—歴史と伝統、そして未来—



松永 基

大陸の玄関口、福州市

2017年11月、中国福州市^{ふくしゅうし}に建築士会連合会の国際会議で訪れた。福州市は台湾海峡を挟んで大陸の玄関口だ。僕は帰途、台北に私用があったので、台湾にも寄りたかった。ところが、中国と台湾の関係は、民間では交流が盛んだがまだまだ微妙で、福州—台北は日に1便フェリーがあるのだが、あまり一般的ではないようだ。今回はずっと南の香港トランジットで、東京—香港—福州—香港—台北—東京と、目的は福州市と台北、その距離200kmなのに、「ずいぶん南に行かないとならないのだなあ……」と思った。

福州に着くと、中心地の南の烏龍江という河の中州、ガラスカーテンウォールのモダンなホテルに逗留した。僕は出張先では毎朝ジョギングをする。翌朝このあたりを走ってみた。ところがこの中州は3kmくらいあるのだが、ほとんどが工事中で何も無い。売店のひとつもない。横浜のみなとみらいや幕張の開発途中はこんなだったのかな？と思いつつ、翌朝も10km程度走ってみたが、人の気配は感じなかった。

保存状態のよい歴史博物館のような街並み

最終日、市の中心街に行く機会を得た。市の中心街は活気があり人も自転車も多く、これぞ中国といった雰囲気



三坊七巷



民家の主人を表す梁



建具



回廊の肘掛け椅子



福州市の街並みの模型



気。三坊七巷という町の中心街にある一角は圧巻だった。三坊七巷は7世紀、唐の時代より発展した。中央のメインストリートに対して、左右に路地があり、その路地が坊と巷なのだ。路地から路地に木造、煉瓦造の建物が並び、明、清、民国時代の建物がつくる街並みは、まさに建物歴史博物館といった風情だ。福州市もこのエリアの観光に力を入れており、2006年から歴史文化地区としての保護修復プロジェクトがはじまり、古い建物や道路の修復が行われてきたそうだ。路地を電気自動車を通り、制服を着た美人のガイドさんが何人も行き交っている。

このエリアの住宅は裕福な商人か役人(官僚)が多かったらしく、門こそ狭いが奥に奥に長く、中庭で多くの棟が繋がっている。塀の中にこんなにも豊かな空間があるのに驚かされる。その多くは木造だ。太い柱、梁に木造の屋根を架け、木造の回廊がある。

隣家との境、街区との境は煉瓦造の壁、これは火事の時の防火壁の役割があるのだろう。

多くの家は塀からの門を入るとホールのようなスペー



福州旧市街地メインストリート



唐時代の屋敷



福州市の街並みと遊歩道

スがあり、そこに梁(丸太)が架かっている。その梁の位置は主の不在、出張などで変わるそうだ。ホールからは中庭になっていて、各家族が暮らしている。回廊には肘掛椅子が配置されている。無垢の木材で優雅な曲線が美しい。建具にも組子彫刻が施されている。これらの保存状態が非常に良いのには驚かされた。このような家が200軒以上あるという。日本は木造建築の国と思っていたが、中国の奥深さを改めて感じた。

中国独自のスタイルが残る山間の町「嵩口」

もうひとつ嵩口^{ソウコウ}という小さな山間の町を訪ねた。福州市の中心地より南西60kmに位置し、2本の川の合流点にあり、山と街の接点として古くから交通の拠点となり栄えた町だ。しかし、現在では人口も減少方向で復興途中にある。この町の面白いところは、南宋王朝(12~13世紀)から変わらない街並みである。特に家族が集まって住む中国独自のスタイルの民家が多く残っている。城壁に囲まれた民家には、8~10世帯が暮らしを共にしている。

福建省の円形住宅、世界遺産の「福建の土楼」も同じ構成で、ぜひ見たかったのだが、山奥で500km以上南



嵩口の街並み

西に進まないと到達できないので今回は諦めた。嵩口の建築の多くは木造でできていて、その境に煉瓦造の壁(防火壁)があり、その壁は平瓦で覆われ独自の雰囲気を作っている。この町も観光資源として開発できないか? 現在その道筋を探っている。

無限の発展が期待される地方都市「福州」

話を福州の中心に戻そう。福州市は港、空港のある沿岸地域から市の中心まで河沿いに80kmくらいある。東京から小田原くらいの距離だ。その80km、川沿いに遊歩道を作ろうとしている。前に述べた中州から中心地までの20kmが完成していた。その遊歩道の長さも長いのだが、整備も行き届いている。緑が植えられ、公園や休憩場も作られ綺麗に清掃されている。

福州市は中国の経済開発区に指定され、都市計画が進んでいる。港からの道路などの整備、高速道路による移動、日常の自転車や歩行者までの移動を考えて都市計画をしているのだろう。さすが万里の長城を建設した国だ。80kmや100kmの遊歩道などの建設は当たり前なのだろう。

今現在も大きく発展していく中国。そのひとつの地方都市の福州市。市のインフォメーションセンターで福州市の今後のあり方の模型と映像を見た。そこには東シナ海のハブとなって無限に発展する姿が描かれていた。

ある若者にたずねてみた。

「君は福州市の未来はこのような姿になると信じているの?」

若者は答えた。

「もちろん、福州市は世界の街にもひけをとらない街になる。」

素敵な答えだ。今、どれだけの日本の若者が胸を張って自分の住んでいる街の夢の発展を信じているだろうか? 僕は若者の若さを羨ましく思った。

くろ だく さ おみ

黒田草臣氏に聞く

見て触れて使うことで 焼き物の良さを感じてもらいたい

「しぶや黒田陶苑」を経営しながら、陶芸家の発掘や展覧会のプロデュース、また陶芸評論など、幅広く活躍されている黒田草臣さん。穏やかにお話しされる黒田さんですが、焼き物に対する思いは熱く、聞くものの心を惹きつけます。今回は、黒田さんが4年前に京橋にオープンした、北大路魯山人作品を並べる「魯卿あん」で、焼き物の魅力やご自身のこだわりなどをお話いただきました。



— 陶器のお店を始めたきっかけを教えてください。

父は愛知県の宮大工兼農家に生まれましたが、次男坊でしたので小学校卒業と同時に東京の陶器問屋へ丁稚奉公に出されました。昭和10年に日本橋で独立して黒田陶苑を立ち上げ、魯山人作品など割烹食器を主に商っておりまして。子どもの頃から焼き物に囲まれて育った私は、自然と焼き物が好きになったようです。

私が自分の店を持ったのは昭和44年のこと。大学を卒業してから、一時商社に勤めましたが、いつかは自分の好きなものを並べた陶芸の店をやりたいと思っていたので、26歳の時、数寄屋橋の地下街に小さな店を構えました。

— 当時は主に何を扱っていたのでしょうか。

3坪の狭い店でしたが、家賃を払うのが大変でしたよ。そこで日常一番使われていた湯呑を350種類ほど揃え、陳列棚を特注しました。焼き物は使うと味が出て面白いことを知ってもらおうと、使うほどに変化してくる汲出茶碗を選んで使い、お客様にお茶を煎れてお出ししました。地方で探した個性的な陶芸家に特注した湯呑の評判がよく、遠くからもお客様が来てくださいました。

私はただ焼き物が好きだけです。売れそうなものを仕入れるのではなく、自分が好きなもの並べて私と好みと同じお客様に手に取って見ていただく。口下手な私を器がその良さを語って補ってあげれば良いと思っていました。湯呑以外の陶芸品も扱うようになり、翌年から百貨店などで展示会や個展を開催しはじめました。

— 北大路魯山人と交流があったそうですね。

父がまだ修業中だった昭和9年頃、北大路魯山人の料亭「星岡茶寮」で書道の講演をしていました。書道を習っていた父は聴講しに行き、魯山人と知り合い、その後、意気投合したようで親しくさせていただきました。

昭和10年に独立した父は店舗併用住宅の二階で暮らしていましたが、子どもが多くなり手狭になったので、魯山人の勧めで第二参考館に移り住み、しばらく魯山人

と一緒に暮らしていました。その後、魯山人に紹介された民家を移築し、私はそこで生まれ育ちました。魯山人の家から歩いて5、6分のところ。叔父家族が登窯の向かいに住んでいたため、子どもの頃からよく遊びに行き、魯山人のことを「おじさん」と呼んでいたのです。

“自然は芸術の極致、美の最高である”といいながら芸術を創り出した魯山人は、邸内にたくさんの樹木を育てていました。草木だけでなく虫1匹にも愛情を注いだのです。ある日、雪柳の小花を竹竿で掃って遊んでいたら、魯山人に見つかってしまい怒られると覚悟しましたが、「花にも命があるのだよ。かわいそうじゃないか」と優しく諭されました。“自然美礼賛”の魯山人は自然と芸術を共有することを大事にする方でした。

この魯山人の美意識が好きで、私の憧れでもあり大きな影響を与えてくれました。焼き物は、自然界の素材を生かす作品を創る陶芸家が私は好きです。

— どのように自分の好きな作家や焼き物を見つけているのでしょうか。

今は車でどこにでも気軽に行けますし、雑誌やテレビなどのメディアでも陶芸家の情報もわかります。私が探した50年前は有名な陶芸家を除いて何も情報がありません。焼き物の里へ行行ってどこかに真の陶芸家は、世に出ていない作家はいないかと、とりあえず煙突を探しました。

薪を燃料にしている人は、焼成方法だけでなく土などの素材や窯の構造にこだわりがあります。話していても楽しい。そういう人たちは公募展に出品する気がない人が多いので、自分から探しに行き、出会うしかありません。互いに意気投合すれば、ともに切磋琢磨してこうと持ち掛けました。とにかく価値観が同じ陶芸家と一緒に作品を創っていきたいという一心でした。

— どのような焼き物がお好きですか。

焼き物には、焼き締めせつきの妬器、釉薬を掛ける陶器、それから石のものの磁器の3種類があります。それぞれ好

きですが、焼き物の原点は焼き締めだと思います。とくに無釉の備前焼にはその魅力がありますね。

——備前焼の特徴を教えてくださいませんか。

備前焼は通常1週間から10日、交代で夜中も赤松の薪をくべて焚かなくてはなりません。備前の土は鉄分が多いため火に弱いので急いで焼こうとすると中に空気が入ってしまい、お煎餅がぷくつと膨れたような火ぶくれを起したり、焼き傷が出やすいのです。そのためゆっくりと時間をかけて焼いて、最後の攻め焼きで1200度まで上げます。

薪だけで焼いていた備前焼ですが、今はプロパンガスに頼ることが多く、最後に少しかき薪を入れるようなことが多いようですが、最初から薪で焼くことが大切で、それが気品や重厚さを与えてくれます。胡麻・焦げ・緋色など、ひとつとして同じものはできないのも備前焼の面白さです。

備前焼には素材となる「土」と燃料の「赤松」だけ、それに薪で焼成することが使命です。土を選び、土づくりをすることが、その作品の「品格」を創り出します。他の焼き物よりも窯出には一喜一憂します。こだわりを持った陶芸家が作った作品、私はそういう備前焼本来の面白さをお客様に伝えたいと思います。

——昔と今では作り方も変わってきているのですね。

昔は土を探して、水車で搗いたりして粘土を作り、それを自ら築いた窯で薪を燃料に試験焼しました。今では業者の方が失敗なく作ることができる粘土や釉を通販しています。窯もできたものを買えます。

陶芸家になるにはいろいろな道があって、そのひとつが大学などや窯業試験場などです。そこで学ぶのが悪いわけではありませんが、あこがれる陶芸家の門を叩いて修業に出て、苦勞に克って陶の道を極めてほしいです。

大学は材料屋と提携しているところが多く、みんなそれを買って作ります。そうすると、独立しても同じものを使うようになります。でもこだわりを持った人は、土を探すところから始めています。土づくりは非常に手間がかかりますが、それを楽しみにされているかどうかで作品のもつ深味が違うと思います。

昔は「1焼き、2土、3つくり」と陶工はいいですが、今は「つくり」が優先してしまうようです。「土がモノを創らせる」というのが本来の焼き物の個性だと思うのですが。

——改めて焼き物の魅力は何でしょうか。

「用の美」と言うように、“美”を感じながら丈夫で使



京橋「魯脚あん」の店内
備前手桶花入や掛軸など
北大路魯山人の作品

えないと意味がありません。焼き物の面白さは、使うほどに表情が変わってくるところです。「侘び寂び」と言いますが、国宝になっている「喜左衛門」や「卯花塙」など多くの人々に使われてきたことで、私たちの五感を満たす温かみや表情の豊かさが生まれてきたのだと思います。備前の徳利は酒がうまいと江戸時代から言われていましたが、ビールもうまいし、水もうまくなる。肌触りも変わってくるのです。これは使わないとわかりません。

魯山人は「器は料理のキモノだ」と言いました。まさに良い器に料理を盛ると、料理と器は互いに輝きます。よりおいしく料理を楽しめることでしょう。

今はインターネットで焼き物を買えますが、焼き物を見て触れないとその肌触り、重さ、バランスはわかりません。実際に手で触れて、本当に好きだと思えるものに出会ってもらいたいと思います。

——貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

インタビュー：2017年3月11日 京橋 魯脚あんにて
聞き手：浦 絵美・八田雅章 (Bulletin編集WG)

PROFILE

黒田草臣 (くろだ くさおみ)

渋谷(株)「黒田陶苑」代表取締役



1943年神奈川県鎌倉市生まれ
明治学院大学経済学部卒業。50年にわたり陶業に携わり、「北大路魯山人展」「大備前展」などの展示会、個展を数多く企画プロデュース。著書に『美と食の天才 魯山人』『魯山人おじさんに学んだこと』『名匠と名品の陶芸史』(講談社)、『現代日本の陶芸家125人』(小学館)、『とことん備前』(光芸出版)、『備前焼の魅力探求』(双葉社)ほか。

サステナブル社会から SDGs へ



大野二郎

環境建築デザイン (環境から学ぶ)

私が社会に出た1974(昭和49)年は、第4次中東戦争が勃発し第一次オイルショックをもたらし、戦後の高度経済成長が終焉した時代であった。社会不安が想起され、市民はトイレトペーパー買い占めに走り、建設業界では建設発注が激減した。化石エネルギーに過度に依存する社会に警鐘を鳴らし、建築設計では空調設計からパッシブや省エネに舵が切られた時代を経験した。

環境に深くかかわる切っ掛けは、「沖縄熱帯ドリームセンター」(BCS賞/JIA25年賞等受賞)の設計監理の経験であった。現地調査や設計および現場常駐監理で、亜熱帯性気候を経験し、沖縄の歴史文化に親しく触れ合うことができた。夏の蒸暑気候を緩和する日陰や自然通風効果の検証、冬の冷風や台風時の防風壁の効果検証実験、大型煉瓦の落下防止機構の実験など、「技術の日本設計」から「環境の日本設計」に変容することとなった。その後の設計は地域ポテンシャルを生かし、環境要素技術を環境建築デザインに昇華するテーマの虜になった。

再生可能エネルギー (太陽から学ぶ)

第二の転機は、1996年に太陽光発電(Photovoltaics = PV)の通産省関連のPV建材化委員会への参加であった。国際的なPVセルやPVモジュールの研究開発競争により、建築がエネルギー消費の場からエネルギー創出の場になる革新的技術実用化の期待がされていた。新エネルギー産業技術総合開発機構(NEDO)からは、IEA/PVPS/TASK7国際検討会議に派遣され、海外調査やBIPV(建材一体型太陽光発電)建築設計での経験を積み、環境建築デザインのあり方の知識を蓄積した。「投資育成ビル」でJIA環境建築賞優秀賞を受賞したのもその頃であった。NEDOや建築学会での太陽光や太陽熱の建築環境デザインの出版も手掛けた。COP21(パリ協定2015)も発効し、2100年までに2°C未満に抑える国際的な枠組みの中で、我が国は2030年までに温室効果ガスを26%削減しなければならない。再生可能エネルギー

利用は、地球破滅を防止しサステナブル社会を実現する人類の知恵である。

建築家の役割 (社会から学ぶ)

建築は古来より風雨や外敵から人間を守り、快適な環境をつくるシェルターとしての機能を果たしてきた。とりわけ産業革命以後の近代建築では、地球資源である鉄・コンクリート・ガラスを用いて、豊かで快適な都市・建築を築いてきた。これらはすべて大量にエネルギーを消費することで成り立っており、地球温暖化の原因ともなっている。われわれ建築家・建築技術者は、この事態に「古の知恵と新たな技術」で立ち向かわなければならない。地球温暖化に手を貸す今までの設計手法では済まされない事態となった。

化石燃料の枯渇、地球温暖化、森林破壊が進み地球生物存続の危機が迫っている現在、ZEB/ZEHの実現は建築家の必須の目標である。1963年「宇宙船地球号」を出版したバックミンスター・フラーはフォスター／ピアノ／ロジャースらに多大の影響を与え、READ会議(Renewable Energies in Architecture and Design)では「再生可能エネルギー活用が新しい野心的な建築創造となる」(トーマス・ヘルツォーク)宣言を出し、以降彼の目を見張る活動の理論的支柱となっている。

Sustainable Development Goals/SDGs

(世界から学ぶ)

国連「持続可能な開発目標(SDGs)」が2016年1月に正式に発効した。17の目標は、世界の貧困に終止符を打つため、経済成長を促し、教育、健康、社会的保護、雇用機会・雇用機会を含む幅広い社会的ニーズを充足しながら、気候変動と環境保護に取り組む戦略が必要であるとする。

建築テーマは多様化している現在、安全安心・幸福平和な社会へ、建築を取り巻くすべての様相と関係性をどう紐解くかが重要なテーマとなっている。

抱負を語る

未来の医療・福祉を
創造するために

望月厚司



医療施設や福祉施設を専門に25年間建築設計をしてきました。以前勤めていた設計事務所での17年間の経験は、私にとってかけがえのない財産になりました。医療施設や福祉施設の設計は、運営者や利用者の使用方法などの理解を深め、建物に何を求めているのかをイメージするための思想を学ばせていただきました。施主の理想を具現化するため、多種多様な要望や建物に対する想いを聞き出しながら、新たなイメージを描いていきます。基本的には、私の設計思想を押し付けるのではなく、施主とさまざまな話をし、建物の骨子を作りあげていきます。

以前、障がい者施設の設計を通して感じたことは、地域によって「施設」に対する負のイメージが残っていることがあること。施設に対する悪いイメージを払拭し、閉鎖的にならないように社会に溶け込み共生する環境を作れるようにしなければならぬと感じています。このような施設は、公共性の高い建物であり、イメージをよくするために親しまれるデザインが必要だと思いますが、デザインのみ重点を置いてはいけません。機能美や動線、使いやすさが損なわれては意味がないと考えています。あくまでも両立し、機能美からデザインを提供していくことを目指しています。多くの人に建築の楽しさを伝えていき、だれでも利用できる建物を作り、バリアフリーやノーマライゼーションなどの、法律や言葉の必要ない環境づくりを目指したいと思います。



舎人あかしあ園 外観



舎人あかしあ園 内観

抱負を語る

クライアントの
期待の先へ

清水裕子



先日、自宅を設計させていただいたクライアントからメンテナンスの依頼があり、打合せに行った。打合せは途中から「竣工10周年パーティ」に変わり、昔話で盛り上がった。

10年前、自宅の設計を依頼したいと電話をいただいた。独立して間もない私たちは多くないチャンスに喜び勇んで案をつくり、会いに行った。しかし、クライアントからは、まだ会ってもいないのに案をつくってくるなんて間違っていると啗められた。最初のやり取りから一転、設計は順調に進み今日を迎えているが、「あの時、怒られましたね」と話すと、驚かれ、真意は違うとの返答だった。クライアントは建築雑誌を見て、若い建築家に設計を依頼したいと電話を掛けたが、断られるだろうと思いつつ、最初の打合せの日を迎えたとのこと。ところが、断るところか、私たちは模型と図面を持ってやって来た。仕事になるかも分からないのに、案をつくってくるなんて安売りになる。他の依頼人であれば、足元を見て過剰な要求をされてしまうのではないかと心配になり、親心が芽生えたとのこと。私たちはさまざまな思いを込めて設計をしているが、逆にクライアントからこのように想われていたとは考えもしなかった。

事務所設立から12年が経ち、竣工した物件も50件を超えたが、描いていた建築家像はまだ遠い。JIAへの入会を機に、先輩方から多くを学び、努力賞ではなく、施主の期待以上の提案と結果が出せる建築家になりたいと思う。



M.house LDK

建築セミナー実行委員会

“見て、聞いて、建築を感じる”
建築セミナー2016を終えて建築セミナー事務局
佐藤由巳子

2016年度は、実行委員長 山梨知彦氏(日建設計)の下、以下の9つのプロジェクトを行った。

1. 巨匠が生み出した今を生きる名建築

構造家の川口衛氏と山梨氏の対談「感性と知性で生み出されたレガシー」で開講し、後日、川口氏の案内で国立代々木競技場を見学した。川口氏の臨場感あふれる当時の設計プロセスや、今後の世界遺産に向けた活動についてのお話もうかがった。

2. 大人のアドベンチャー：大谷石採石場を巡る

E.L.ライトの建築で名高い大谷石の採掘地、宇都宮市に行き、大谷石を利用した地元の建築群を見学し、建材としての可能性を体感した。採石場の跡地の一部では、現在アドベンチャーツアーが生まれ、参加した30数名は暗い洞窟のような空間を歩き、溜まった地下水の中をボートで巡るなど探検気分を味わった。

3. AIと人がつくりだす未来の環境

アマゾン・ジャパンの児玉哲彦氏(IT製品開発マネージャー)を招き、山梨氏との対談でAIの現状と未来を語っていただいた。加えて、藤村憲之氏(アーティスト、デザイナー、研究者)を迎え、グループごとに持参した携帯電話を使い、自動で対話するプログラムを開発し試行した。

4. ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展と現在

ビエンナーレにたびたび参加している塚本由晴氏(アトリエワン、東京工業大学教授)の司会で、2016年の日本館のキュレーターを務めた山名善之氏(東京理科大学教授、フランス政府公認建築家)を迎え、日本館のコンセプト等を聞いた。また、参加した建築家たちから作品群の紹介を受けた。

5. 伝統の先にあるもの—木造建築の未来

杉坂智男氏(杉坂建築事務所初代表、元レーモンド事務所)のアトリエ(都内マンションの1室を木造家屋風に改修)を訪ね、戦後から現在に至る、自身の木造建築についての思いと作品群の紹介を受けた。後日、元所員の落合俊也氏(森林・環境建築研究所)のアトリエを訪ね、新月伐採した葉枯らし木材で造られた省エネ型空間を体感した。加えて、木材が省エネで健康にも良いと立証す

る宮崎良文氏(医学博士、千葉大学教授)を招き、その学説に触れ、木造建築の今後を思考した。

6. 建築家は自邸に何を託すか？

室伏次郎氏(スタジオ・アルテック)、野沢正光氏(野沢正光建築工房)を招き、自邸に対する思いとその時代背景についてうかがい、それぞれの邸宅を訪問し、体感した。また、同様に住宅トラストでもある旧尾高邸を訪ね、吉村順三の空間を体感した。

7. 根ざす建築

古澤大輔氏みつよしが設計したJR駅高架下の貸店舗群と、宮崎晃吉氏みつよしが設計した築40年の木質アパートをカフェやギャラリーに改修した谷中のHAGISOほかを見学し、彼らの活動の紹介を受けた。さらに、ブルースタジオが手がけた集合集宅「青豆ハウス」を企画した大家、青木純氏の1室と仲俊治氏が設計した「食堂付きアパート」を見学し、それぞれに説明を受けた。各回とも東京藝術大准教授、藤村龍至氏より時代的意味の総括を承った。

8. 日本を飛び出す若き建築家達

パリを拠点に活躍するモロクスノキ建築設計の楠寛子氏から、グッゲンハイム・ヘルシンキ美術館案をはじめ、ヨーロッパにおける作品群の紹介を受けた。次に、日建設計の勝矢武之氏からは、当選したキャンプ・ノウスタジアム国際設計コンペ案とその現状ほか、自身の設計作品の紹介を承った。予定にあったOMA-NY事務所の重松象平氏の回は日程が合わず、次年度に延期となった。

9. 茶碗師が茶室を作った

琵琶湖畔にある佐川美術館内の樂吉左衛門館の設計者、15代樂氏より樂館の設計意図をうかがい、設計施工を担当した竹中工務店の随行により見学した。翌日、京都府内の樂美術館および京都国立近代美術館で開催中の樂家初代から15代に至る展示会を鑑賞し、「樂」の世界を堪能した。

本セミナーは、1978年から39年も続く若い？設計者を対象にした、建築家に「なり続ける」ための自己研鑽の場になっています。2017年度もご期待ください。

交流委員会

2017年度の
交流委員会の活動について



交流委員会
委員長
河野剛陽

交流委員長を任されて2年目の年になりました。昨年度の活動を振り返りますと、JIA建築家大会大阪での協力会員サミットへの参加、フレンズカップ、交流大会・セミナー、各グループの活動等、例年通りの活動はできたと思います。しかし言い換えれば、進歩もなかったと感じています。本来、交流委員会とは、正会員等と協力会員との交流を円滑にするという目的があるにもかかわらず、それほど新たな進展がなかったというのが実感です。交流委員会の委員である正会員とは、十分な交流はできているかもしれませんが、その他多くの正会員等との交流という意味では、不十分であると協力会員の皆様は感じておられることでしょう。

今年の交流委員会の目標としましては、協力会員が各委員会にアプローチしていくことを考えていきたいと思っています。「待っていても始まらない」ということで、協賛という形だけではなく、一緒に作っていくJIA活動

ということを取り組めないかを模索していきたいと思えます。

来年度は、2018 ARCASIA 東京大会、2018 JIA 建築家大会東京、2019年支部大会千葉とイベントが立て続けに開催されるため、交流委員会としては、これらの各大会へのかかわり方が今後の活動に重要なポイントになるのではないかと考えています。

交流委員会では、各グループで建物見学会、ゴルフコンペ、懇親会等いろいろなイベントが開催されています。正会員等の皆様への参加募集も行っていますので、参加をお待ちしております。

今年も、どのようにすれば、より多くの正会員等との接点を持てるかについて検討してまいります。また新たに、他の委員会とも連携をして活動していく方法も模索していきたいと思えます。交流委員会の活動にご協力お願いいたします。



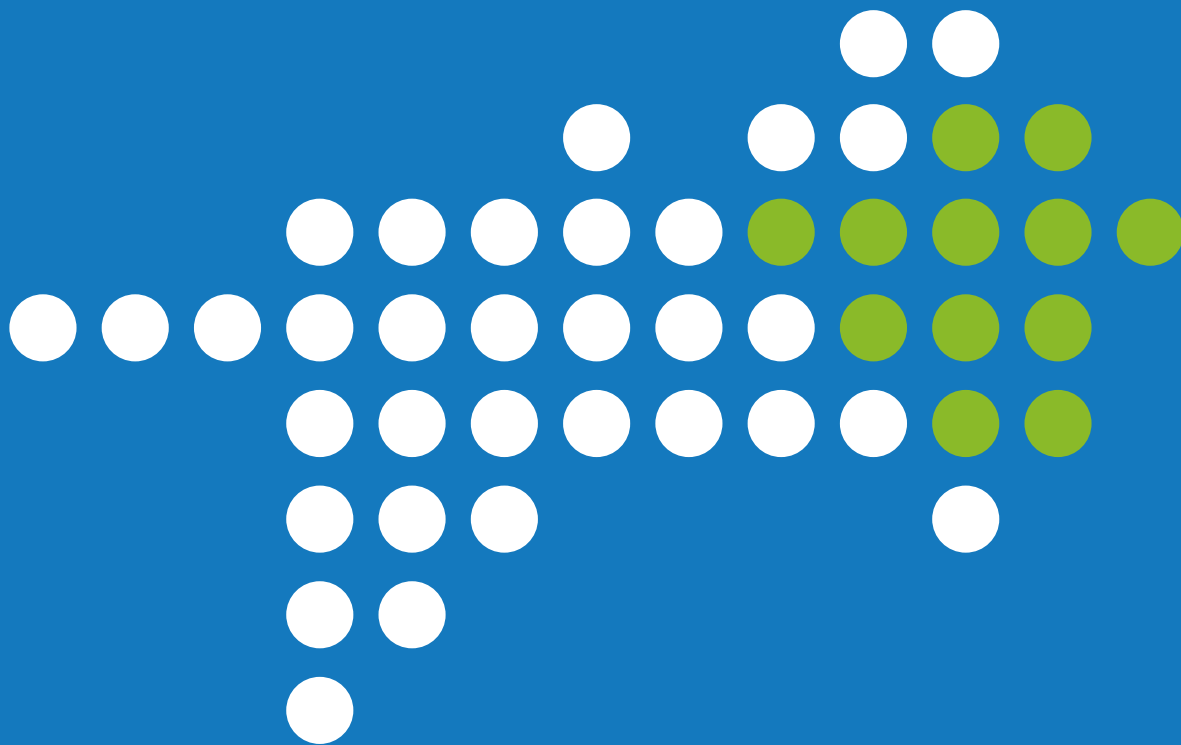
大阪大会「法人協力会員サミット」



第29回フレンズカップ



交流大会



9th 28th Thu 29th Fri 30th Sat

JIA 建築家大会2017四国 阿波おどりの国 とくしま大会

十数年ぶりの四国での全国大会。
前回の内子大会から、
時代は大きく変わりました。
全国の地域に共通する、
建築を取り巻く課題について
海に囲まれた四国に
再び籠って話し合います。

「建築家と土着」を考える。
「環境」、「防災」、「AI」といった
今日的な課題に哲学や
経済といった概念を交差させ、
「地域の知恵」に基づく
「建築家と土着」の意味を問い、
次代を照らす光を
見つけ出せたらと思います。

主会場
あわぎんホール
徳島市藍場浜2丁目14番地

9月28日[木]

- 午後:シンポジウム1「防災」
- 午後:シンポジウム2「環境」

9月29日[金]

- 午前:シンポジウム3「AI」
- 午後:大会式典
- メインシンポジウム「建築家と土着」

9月30日[土]

- エクスカーション

お問い合わせ:大会事務局 770-0941 徳島市万代町5-71 TEL.088-626-9567 FAX.088-626-9568

JIA 30th ANNIVERSARY

JIA National Convention

Shikoku Tokushima 2017

「建築家と土着」

グローバルに生きる。



The Japan Institute of Architects
in SHIKOKU

公益社団法人 日本建築家協会 四国支部

<https://www.jia-shikoku.org>

JIA 建築家大会 2017 四国 阿波おどりの国とくしま大会、開催準備は着々とすすんでいます。スケジュールや各プログラムなどもほぼ固まってきました。詳細なスケジュールはHPなどで追って発表させていただきとして、ここでは今大会の特徴や、主なシンポジウム、企画などについてご紹介します。
(実行委員長：内野輝明)

● 阿波おどりの国とくしま大会にぜひお越し下さい!!

メインプログラムと会議・フォーラムは時間が重なりません

3つのシンポジウムは、基本的に他のプログラム(会議やフォーラム)とは重複しない構成になっています。3つのシンポジウムに参加してイメージを共有してから、2日目午後、大会式典後のメインシンポジウム「建築家と土着」に参加していただくという趣向です。つまり、みなさん、ぜひ初日からご参加下さい!!

ボードウォークでのウェルカムパーティー、「バンド大会」や「アーキカフェ」も企画中

ウェルカムパーティーは新町川のボードウォークで開催します。「水都とくしま」らしい景観を楽しみながら心地よい夜を過ごしましょう。ウェルカムパーティーの後には「バンド大会」を開催。建築について語り合いたい皆さんは、若手が企画している「アーキカフェ」へご参集下さい。



メイン会場は西山卯三設計の「あわぎんホール」シンポジウムはここで開催します

メイン会場は徳島駅から歩いて5分、西山卯三設計の「あわぎんホール」(徳島県郷土文化会館：1971年竣工)です。西山先生のスケッチなどをお借りして展示も予定しています。800名収容の大ホールで全シンポジウムを開催します。周辺では、寺町散策、眉山へのロープウェイ、ひょうたん島クルージングや阿波踊り体験なども楽しめます。

四国には見どころたくさん！ぜひこの機会に訪れてみて下さい

愛媛県今治市役所、香川県庁、香川県立体育館などの丹下健三建築、イサムノグチ庭園美術館、高知は椿原の森と木の建築、高知市内の土佐派の木造建築、四国の真ん中祖谷の古民家ステイ、うどんツアー…。これらを訪れるエクスカージョンを企画中。めったにこれない四国の景色、文化、食事など、各県の土着の粋を集めてお待ちしております！

● 3つのシンポジウムとメインシンポジウムの概要



建築家と土着
—グローバルに生きる—

9月29日 金 15:10～

パネリスト
原広司(建築家)
布野修司(建築・都市研究家、建築批評家)
山本長水(建築家)

AI産業革命が進む中で、人類がこれから何処でどのように生活するかが問われはじめています。かつての産業革命が集落を壊して現代都市をつくったように、AI産業革命は新たな生活空間を産み出すのでしょうか？

布野修司氏が連続した3シンポ(防災、環境、AI)が提起した内容を整理し、考える手がかりを示唆します。原広司氏が集落と現代建築・都市の世界を講演し、山本長水氏が土着の生活に寄り添う建築について講演します。

そして、新たな建築、居住の世界についてリアルで深い思想的なメッセージを得られるシンポジウムを目指します。

シンポジウム1「防災」

日常と非日常のはざま

—「防災」から「栄統」へ—

9月28日 木 13:00～

自然の猛威に対して防潮堤を無限に巨大化することや単純に土地を嵩上げすることが果たして正しいのか……。古くから伝わる地域の知恵に学び、建築周辺のしくみを考え直すことで、災害から身を守ること(防災)から栄え続けること(栄統)を積極的に考える方向に意識を転換できないかを考えます。

パネリスト
岡村真(高知大学名誉教授：地震地質学、巨大地震予測研究)
三井所清典(芝浦工業大学名誉教授、日本建築士会連合会会長)、他

シンポジウム2「環境」

地域の伝統的知恵から
次世代環境建築を模索する

—吉野川と空の里集落を事例に考える—

9月28日 木 15:00～

建築単体の環境性能が問われてくる一方で、地域の居住文化、伝統的な技術で支えられた環境への持続性や知恵の継承は、地域で暮らす者にはとても大切なテーマです。山、川、海と繋がった循環の仕組みや、気候風土と生態系に基づく生命と直結したホリスティックな環境づくりが、低炭素化社会の実現において重要な課題だと考えます。

パネリスト
小玉祐一郎(建築家)
中村勉(建築家)、他

シンポジウム3「AI」

AIによる建築の未来世界

—建築の本質的革新が始まる。—

9月29日 金 9:00～

AIを最適化を求めるテクノロジーと捉え、彦根氏が最適化を求める先端的なテクノロジーによる現実の建築の世界を講演し、小淵氏が最適化できないところの価値に未来の建築の世界を見出す講演をします。そして、現実と未来の両面から対論を交わす中から、新たな土着の建築にも結びつく未来の世界が見えてくる機会とします。

パネリスト
小淵祐介(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻准教授)
彦根茂(Arup東京事務所特別顧問)

※28日は、12:00からの災害対策全国会議+フォーラムを第一部、シンポジウム1「防災」を第二部として連結する予定です。

地域に根差した建築家の活動

～こども目線のまちづくり活動

JIA 神奈川と藤沢市との

「建築物の耐震改修の促進及び災害時の協力に係る連携協定」



神奈川地域会
三原栄一

歴代JIA神奈川代表が中心となり、横浜市や神奈川県との地道な繋がりを土台にして、現飯田善彦代表の実行力と推進力をもって、2014年に横浜市とJIA単独で、まちづくり・建築分野の包括連携協定が締結されました。

一方1997年、湘南在住の建築家5人がコアとなり、藤沢市内で行政、議会、学生、市民有志が結集し「ふじさわこどもまちづくり会議実行委員会」を立ち上げ、今日まで継続しています。

このボランティア事業は今年で満20年を迎え、三代にわたる藤沢市長に見守られており、行政・議会・教育委員会、そして何と言っても市民に親しまれる活動となっています。この実績があつてこそ、今回藤沢市との連携協定締結に至っているのです。

目的

こどもたちの感性のすばらしさと集中力のたくましさを地域教育の中で育み、こどもたちが大人になった時に、自分のまちを自慢でき、愛着をもってもらうきっかけをつくるのが目的です。そして、他の小学校や学年の違う子どもたちと一緒に、学生・社会人スタッフと協力しながら一つのまちをつくり上げる達成感と喜びを感じてもらうことで、まちづくりの基本である人との関わりを学んでもらうことも、この活動の特徴です。

具体的な内容

この活動は1998年の第1回大庭地区から始まり、毎年1回(第12回・13回は同年春秋2回)秋の週末2日間、藤沢市内13地区を毎年替えて開催し、昨秋第20回鵜沼地区記念大会を開催しました。参加者は、昨年度より参加人数を増員して、藤沢市内在住の小学生50名が対象です。スタッフはコアの社会人20人程度に、開催地区の市民ボランティアと学生30数名からなります。

1日目にこどもたちがスタッフとともに開催地区を散策して「現在」を知り、地域を熟知する方にそのまちの歴史について講義していただき、その資料を通じて「過去」を学びます。その上で、こどもたちが自分のお父さん、お母さんの年齢になった時、そのまちがどんなまちに変わっていたら良いかを話し合い、一つの結論を決定します。

その会議決定に従った30年後の「未来」のまちを、1日目後半から2日目に掛けて制作します(1/500の都市計画模型)。

話をJIA神奈川に戻します。

次なる提携先として、2015年飯田代表から私に湘南エリアの行政に絞られてのご相談があり、それならば湘南のへそである藤沢市が、上記活動を通じて行政との風通しもよく最適ではと答申し、同年2月6日に鈴木恒夫藤沢市長との面談が実現しました。

しかしながら、横浜市と異なり当会と藤沢市の繋がりが全く無かったため、古くから藤沢市と提携のある神奈川建築士会や神奈川県建築士事務所協会を含めた三会と藤沢市との連携協定を2年の長きにわたり調整を行い、2017年2月15日に「建築物の耐震改修の促進及び災害時の協力に係る連携協定」を締結しました。

単独ではなく三会との連携、かつ耐震改修と防災についてのみという点で横浜市より窮屈ではありますが、今後横浜市のような包括連携協定へと進めていきたいと、藤沢市行政担当者とも継続して協議しています。

いずれにしても、JIAがこれまで関わっていなかった地方行政との大きな一歩であると考えています。ゼロから1が最も難しいことはすべての活動で共通した常識です。横浜市との一歩無くして藤沢市との連携協定はありませんが、この二つの協定を機に、JIA神奈川では、第三、第四の自治体との連携を結んでいきたいと考えています。



藤沢市との調印式(2017年2月15日)

関東甲信越支部会報誌『Bulletin』季刊化のお知らせ

支部広報委員会より、新年度(2017年度)の支部会報誌『Bulletin』について、皆様にご連絡いたします。

これまで『Bulletin』は、隔月の定期発行号とアニュアル号を併せ年間7号を発刊してきました。広報委員会では今後の活動を含めて誌面刷新を検討した結果、2017年度は試験的に『Bulletin』を季刊発行することにいたしました。

新年度となる今号は夏号となり、アニュアル号との合併号として発刊します。その後は順次、秋号(10月中旬発刊予定)、冬号(1月中旬発刊予定)、春号(4月中旬発刊予定)を予定しております(諸事情により発刊予定日は前後する場合があります)。

●今年度の発刊スケジュール



なお、詳しいスケジュールや掲載依頼等の相談は、広報委員会(支部事務局)までお問い合わせください。

皆様のご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

(『Bulletin』編集長 長澤 徹)

関東甲信越支部HPリニューアルについて

昨年度にかけて、WEB改定ワーキンググループを立ち上げ、支部サイトのリニューアル化の検討を進めてきました。

既存2つのサイト(オフィシャルサイト+市民向けサイト)のベースは、それぞれ10年、6年以上経ち、時代に即した抜本的なリニューアルが必要となっていました。また、維持管理費の削減も大きな目的です。WEB改定WGには総務委員会からも数人が参加して、議論しました。

サイトリニューアルの目的は、JIA内外に対して、シンプルかつ解りやすい情報発信に努め、大きく3つの柱を立てました。

- 解りやすさを重視し、肥大化し過ぎた情報の整理からはじめ、最小限の情報からシンプルにスタートする。
- 「活動」の対外的な「見える化」を図り、市民がよりJIAへの理解を深める機会を作る。
- 情報のUPを可能な限り当該会員が自ら行えるようにシステム化して、活性化とタイムリー性を目指す。

HPデザイン会社選定にあたっては、プロポーザルコンペを行い、一次プレゼンテーション、二次プレゼンテーションを経て、5月末に会社が決まりました。

今年度はいよいよ、具体的な作業に入ります。前半は、HPデザイン会社と共にコンセプトの明確化、JIAにふさわしいデザイン等、広報委員会内で議論を重ねて制作していきます。後半は会員の皆様に運用方法の告知等を進め、来年度には新しくリニューアルされたHPの公開を目指します。

会員の皆様、楽しみにお待ちしております。

(HPWG主査 中澤克秀)



建築家online

支部サイト

■ ご意見・ご要望受付、お問い合わせ先

JIA 関東甲信越支部事務局 大西

E-mail : mohnishi@jia.or.jp

TEL : 03-3408-8291 FAX : 03-3408-8294

退任の挨拶

大きな変革に舵取りをして
バトンタッチ

前広報委員会委員長・HPWG 主査
高橋隆博



このたび、支部常任幹事の任期満了に伴い、委員長職も次の方へバトンを渡すこととなりました。まずはそのご報告と、JIA内外のお世話になりました方々へ、これまでの御礼を申し上げます。

在任中は、支部長をはじめ執行部の顔ぶれも更新される中、正会員の高齢化と会員減少に拍車がかかり、支部財政が切迫するにつれ、私共広報委員会でもさまざまな合理化や将来へ向けての方向性の検討や検証を重ねてまいりました。

会報誌『Bulletin』では、伝統を引き継ぎながらも時代に合わない慣例を見直し、体制やハード面の合理化による固定経費の節減に務めつつも、活字の大型化や協力会員の有効なコンテンツの模索を行いながら、2017年度の季刊化への具体的な準備を行いました。

一方、ホームページでは、任期前半では既存サイトでの市民向けの情報発信の充実に注力、後半では今後を睨んだ根底からの見直しを図り、抜本的なリニューアルに向けてスタートを切ることができ、その成果は2017年度に運用へ移る予定であります。

このように、JIAの大きな財産である皆さまの日々の活動を、よりいっそう社会への見える化や発信を図ってJIAの理解に繋げる。また、会員にとってもより活用性のある広報媒体を提供するといった2点に大きく舵取りをして、次期委員長へ引き継ぎをさせていただきました。

今後とも、広報活動および広報委員会へのご協力のほど、よろしく願い申し上げます。
(アトリエ工)

新任の挨拶

支部活動の見える化と
アーカイブを柱に

広報委員会委員長
市村宏文



本年度より広報委員長を務めさせていただきます。

JIAが公益社団法人へ移行して4年目に入りました。この関東甲信越支部は旧組織体制からの変革が徐々に進んでおり、この広報委員会の任務も変わりつつあります。今年は、高橋前委員長に下地作りをしていただいた『Bulletin』の季刊化、支部ホームページのリニューアル、それを運用しての支部活動の見える化とアーカイブ、それらを活動の大きな柱として委員会を進めてまいります。そして会員の皆様には、支部の内容を細やかにお伝えできる体制を整えていきたいと考えています。

この新しい広報委員会を、どうぞよろしく願いいたします。
(エルスト)

退任の挨拶

誌面充実を目指し
皆さまに支えられた3年間

前『Bulletin』編集長
八田雅章



2014年からの3年間、広報委員会の支部広報誌『Bulletin』の編集長として活動させていただきました。編集長着任時は公益法人化移行1年後という微妙な時期であり、編集長としての役割や今後の編集方針が定まらない中、まったなしで発刊スケジュールに間に合うよう手探りでのご着手となりました。

そのような中で取り組んだこととしては、内容的には、「特集」、「覗いてみました他人の流儀」など、会員向けに充実した内容とすべくさまざまな企画や執筆者、ゲスト選定を行い掲載してまいりました。

また、誌面改訂の試みとして、さらに読みやすくするため文字サイズを大きくしたり、途中、編集制作会社の変更に伴い誌面のリニューアルを行いました。

この3年間、執筆依頼やインタビューに応じてくださった方々には感謝申し上げます。また、高橋委員長をはじめ、共に委員会活動に参加された委員の皆さん、着任間もない状況で助けていただきましたスタジオネオの菅原さん、南風舎の南口さん、八木さんには感謝しています。そして、事務局の大西さんには3年間、完璧にサポートいただき心強い存在でした。大変感謝しています。

新年度は市村委員長、長澤編集長のもと、新委員も迎えて新たな体制でスタートしました。これからはワーキングメンバーとして支えつつ、読者として楽しみにしています。

(八田雅章建築計画事務所)

新任の挨拶

人生初の編集長

『Bulletin』編集長
長澤 徹



今年度の『Bulletin』編集長を任命されました、長澤と申します。人生経験43年半、建築の仕事をして22年、事務所として独立して5年が経ち、広報委員会に参加して2年半、人生で編集長という肩書きがついたのは初めてのように思います。

右も左もまだまだ理解不足なJIAの活動の中で、このような大役をいただいたことは光栄でもあり、同時にその重責に身が引き締まる思いでもあります。

表紙のデザインも新たに、季刊誌として刷新した『Bulletin』。今までと変わらず、少し変わった今期の誌面を楽しみにしていただけるよう、努力いたします。

皆さんからの投稿、執筆、要望、感想などお待ちしております。
(ポーラスターデザイン)

趣味の世界

文化人を閑人と言う人がいます。閑はつくるものであります。私は幼少時虚弱児でした。親は一般社会人として生きていけない、芸人なら花柳壽輔に付いて日本舞踊の師匠にしようと考えたのです。中国の太極拳のような緩やかな動きは私の健康を取り戻し、小学5年以来スプリンターとして活躍するようになりました。それから受験の世界です。東工大建築学科を出て長唄狂の仲人から、貴方は下地があるのだから長唄を習えと強要されて、吉住小健次という師匠を紹介されました。師匠は名人四世吉住小三郎の弟子で、私より24歳年上でした。小三郎は長唄を演奏会芸術とし、東京藝大に邦楽専科を創設し長唄を歌舞伎の伴奏音楽から独立させた人です(吉田五十八は弟子)。

初めての稽古の時「小林さん、何から始めましょうか」と言われたので、一般の手ほどきの曲からと思い「松の緑でも」と言うと、いきなり「でも、とは何です、松の緑がちゃんと唄えればプロですよ。でもとは何です!」と猛烈に叱られました。このことがあって40歳を過ぎるまで松の緑を教えて下さいと言えなくなりました。犬小屋の設計だって馬鹿にはできません。

かなり上達してから賤しずはたおび機帯という曲を稽古した時です。「なにし吾妻の隅田川」という情景描写から物語が始まります。「小林さんの隅田川は幅が無いよ、それじゃ神田川だよ。その頃の隅田川は武蔵と下総を分かち大川で、東に筑波、西に富士、景

色が広いんだよ。隅田川の土手に立ったつもりでもう一遍」。「ん…少し広くなった」。こういう稽古です。

邦楽は音程より間が大切です。間の悪い唄は間抜けです。良い演奏には客席が静まり返り聞き入っているのが、舞台にいて感じます。

幕が閉まって「今日は良くできましたね、だけど私のとおりの歌では面白くない。もうそろそろ自分の唄を唄いなさい」と言われました。自分の唄とは何か。判るのに何年もかかりました。90歳になってもまだやっていますが、喉の自由が思うようにいきません。60歳70歳ぐらいが最良であったように思います。

プロが一日置くようになるのに40年も修行をしたことを思えば、近年の加速度の世界は人間を不幸に導いているようで、恐ろしいです。

今の都市空間は間が悪い。

建築家は資本主義に負けた。

プロフェッショナルはどこへ行った?

(小林道夫)



新年度の抱負

■微力ながら可能な範囲で頑張らせていただきますので、1年間よろしくお願ひいたします。(上原)

■新しいノートに、新しいペンや教科書と、新しいものばかりでスタートしていた頃が懐かしい。久しぶりに、何か新しいものを用意して気持ちも新たに頑張ろうかな。(浦)

■いつの間にか編集委員になっていた…(笑)、編集のお仕事は初めてで戸惑いもありますが、微力ながら何かお手伝いができるように頑張りたいと思います。よろしくお願ひいたします。(中山)

■JIAにも入会したばかりですが、支部広報委員を務めることになりました。きっと何かのご縁ということで、精一杯がんばります。(会田)

■昨年は委員会にほとんど出席できず、八田前編集長には特に大変ご迷惑をお掛けしました。今年は、委員会に出席するところから改めたいと思います。(小山)

編集後記

■10年前にJIAに入会し、直後に支部広報委員会に誘われて5年弱を過ごし、その後本部広報を4年務め、なんと出戻りとなりました。新たな気持ちで取り組みたいと思います。(中澤)

■昨年の「新年度の抱負」を書いたのが、つい先日ようです。時間が過ぎるのを早く感じるほど、節目は大事ななと思います。新しい年を新しい気持ちで頑張ります。(清水)

■前高橋委員長、前八田編集長さんとご一緒させていただきお世話になり、誠に有り難うございました!これから市村新委員長、長澤新編集長のもとで心新たに広報に取り組みたいと思っております!私はJIAに在席してから今年で30年になります!歴代12代の会長様、会の動静を見届いたして参りました!何かのお役に立つかも知れません。(立石)

編集 : 公益社団法人日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会
委員長 : 市村宏文
副委員長 : 長澤 徹
委員 : 会田友朗・浦 絵美・小山将史・清水裕子・中澤克秀・
中山 薫・古谷俊一・吉田 満
編集長 : 長澤 徹
副編集長 : 小山将史
編集ワーキングメンバー : 浦 絵美・中山 薫・八田 雅章・立石博巳・
会田友朗・上原和彦・古谷俊一・吉田 満
編集・制作 : 南風舎

Bulletin 270 2017 夏号
発行日 : 平成29年7月15日
発行人 : 浅尾 悦子
発行所 : 公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館
Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294
印刷 : 株式会社 協進印刷

■JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
・(公社)日本建築家協会(JIA) <http://www.jia.or.jp/>
・建築家online(一般向け) <http://www.jia-kanto.org/>
・JIA 関東甲信越支部(会員向け) <http://www.jia-kanto.org/members/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

©公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部 2017

